



師門手簡 1550-1570 40.8X27.2



奴婢案 1700 33.5X24.0



陶山書院一應置簿 1619 (光海君11) 38.5X26.5



尋院錄 1575-1607 36.5X26.0

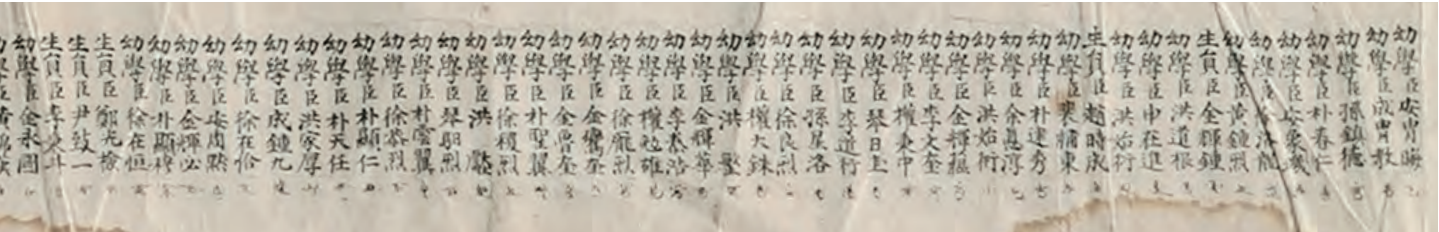
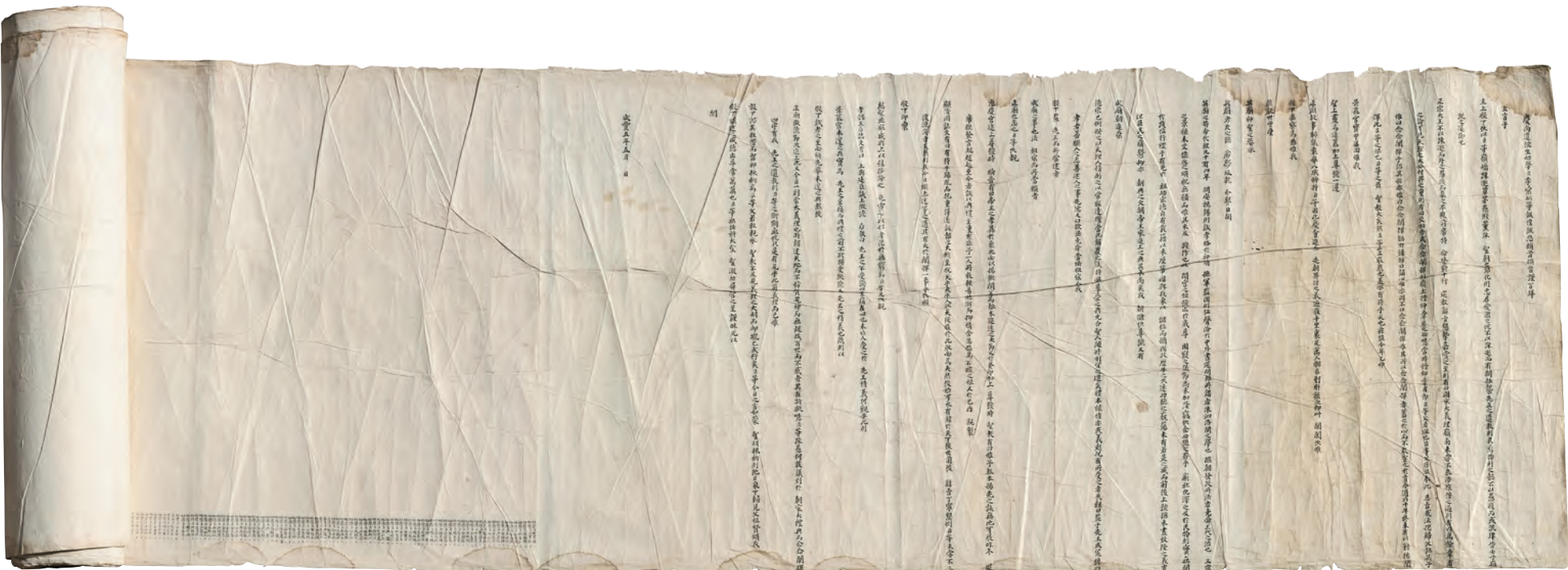
書冊置簿 1775 (英祖51) 30.0X33.0



丙辰九月十三日賜祭時日記 1796 (正祖20) 35.0X21.0



思悼世子追尊万人疏 1855 (哲宗6) 111.0X9,650.0





近思錄·文公家礼儀節·晉書·延平答問 1519-1555
 近思錄 35.5X21.5
 文公家礼儀節 32.0X19.7
 延平答問 31.2X18.7
 晉書 32.7X21.5



中庸諺解 1588 (宣祖21) 36.0X23.0



退溪先生文集 冊板 1600 (宣祖 33) 54.2X21.0



陶山十二曲 冊板 17世紀初 43.0X66.0

講堂で相揖礼する祭官ら



講堂で食事する祭官ら



祠堂の前で再拜する参祀者ら



祭官の役割を定める分定記作成



祭官委嘱状の望記作成



祭官委嘱状の望記確認



祝文作成



祭酒盛り



盥盥献盥



陳設確認



酒樽の蓋を開ける開樽



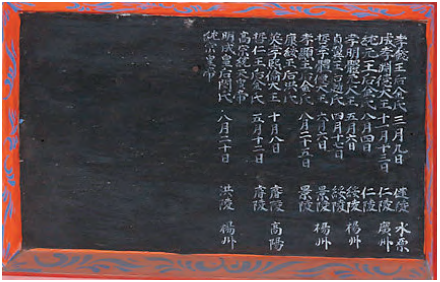
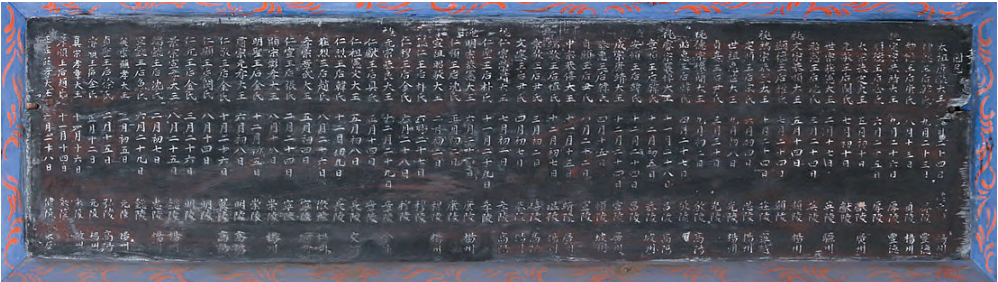
望瘞礼



正謁礼



国忌懸板



郷約約文朗読



朔望礼焚香後再拜



香炉と香盒を祭床の上に乗せる炎香礼



白鹿洞書院院規朗読



書院の運営に関する文書や記録がよく残っている

長城 筆巖書院

- 所在地：全羅南道長城郡黄龍面筆巖里378
- 創建年代：1590年(宣祖23)
- 賜額年代：1659年(孝宗10)
- 国家指定：史跡第242号



筆巖書院は韓国の東南部地域を中心に始まった書院運動が西南部地域まで拡散される過程を立証する。記録物を通じて書院の経済的運営方法が窺え、以前の書院が傾斜地形を利用していたこととは異なり、この書院は平坦な地形に適した配置方法を適用した。

主享人物：金麟厚(1510～1560)

筆巖書院は朝鮮中期の道学者であった河西金麟厚(1510～1560)が祀られた書院で、1590年に創建され1624年に再建されて、1659年(孝宗10)には‘筆巖’と額を賜った。現在の位置へ移建されたのは1672年であり、典型的な前学後廟の配置をとり平地に建てられた書院建築の代表的な事例である。筆巖書院は創建後350年以上にわたり湖南地域の学脈と教育伝統を象徴する書院である。史跡第242号に指定保護されており、生き生きとした運営の姿が示される書院所長の奴婢譜、院長先生案、筆巖書院院籍、奉審録など14冊64枚の典籍と文書とが宝物第587号に指定されている。

湖南の代表道学、者金麟厚

金麟厚(1510-1570)は湖南地域で唯一に文廟に配享された人物である。金麟厚は1540年の大科に及第された後、1543年から世子侍講院で後の仁宗を教えが、仁宗が即位して8ヶ月ぶりに崩じ、乙巳士禍まで起ると故郷の長城に戻り、性理学研究と弟子の養成だけに没頭した。

湖南における性理学発展の基礎を固めて水準を高め、栗谷学派の学説を定立させるのに先駆的な役割を果たし、それにより金麟厚は李恒・柳希春・奇大升・朴光前と共に湖南五賢と呼ばれる。金麟厚は16世紀半ばの性理学理論を再解釈し図式化して、性理学理解の進展をもたらした。性理学の知識をもとに彼は、中央政界で王室の師匠として活躍した。金麟厚の活動は、地方社会の教育を主導していた士林が国家指導層の教育を専担するという点で、士林の影響力が次第に拡大していくことを示す。金麟厚への政府の関心は16世紀以降にも続いた。

18世紀後半には金麟厚のために国王が特別に書籍と扁額を下し、以後の筆巖書院では下された書籍を保管する建物を別に造成した。ついに1796年(正祖20)には文廟に従祀されたが、宋時烈は‘道学と節義と文章をすべて揃えた人はただ金麟厚一人’と称頌し、正祖はそれに‘東方の朱子’との評価を加えた。

書院の景観と建築配置

筆岩書院は、低めの蓮花山(144m)にもたれて建立された平地型書院で、子坐午向をとり前には文筆川が流れる広い平野が広がっている。正門にあたる門楼の名前が‘廓然楼’であることも、このように豁然とした景観を眺めるのに適切な意味が与えられたのである。

筆巖書院の建物は南北子午線を中心軸として左右対称に配置された典型的な儒教建築である。講堂の清節堂をいつも祀宇の祐東祠が眺められるように北向きに向かせたのが特徴である。

祀宇の祐東祠は、書院の祭享空間として‘天佑我東’すなわち‘天の助けを借りて東方に生まれた人が金麟厚先生だ’という絶賛の意味が込められている。祐東祠の中央の北の壁に金仁后、東の壁に梁子激の位牌が祀られている。扁額の文字は『朱子大全』から集字し書いたものである。

清節堂は書院の殆んどの行事と儒林の会合、学問の討論場所として使われた講堂である。賜額懸板である‘筆巖書院’は屏溪尹鳳九(1681～1767)が書き、‘清節堂’の扁額は宋浚吉の字と伝えられている。清節は、河西の清い節義を反芻するのを意味する。清節堂には、扁額を含めて文廟従祀頒教文、教書、傳教、致祭文など、追崇と祭享記録、白鹿洞学規、そして高敬命、鄭澈、權輶、金口憲、金昌翁、尹鳳九などが詠んだ24点の題詠が懸板となって懸けられている。

筆巖書院の建築配置は、平地を考慮して設計された。一般的な書院では講堂と祀宇が向き合わないが、筆巖書院では講堂と祀宇が向き合いながらその間に斎舎が左右に配置される特異な形式を採っている。東斎の進徳斎は西斎の崇義斎は神室である祐東祠と講堂である清節堂とともに前学後廟の配置をとり、成均館や郷校など他の儒教建物の配置構造に似ている。東斎と西斎は院生の居所であり、その扁額の字は宋浚吉が書いたという。

廓然楼は外三門を兼ねるのに大きく広い無限の領域を意味し、その扁額は宋時烈の字である。苕川金時稔の廓然楼記(1760年)、櫟泉宋明欽(1705-1768)の重建上梁文(1772年)が懸けられている。廓然楼記には‘程子の曰く君子の学問は廓然で大きく公である。金麟厚の人品と学問が廓然で、尤菴(宋時烈)がこの二文字を取った。’とし、‘廓然大公’からの命名由来が記されている。正面3間、側面3間の重層入母屋として造られている。

敬蔵閣には仁宗から受けた墨竹図の板刻があり、扁額の字は正祖の御筆と伝わる。蔵板閣には『河西文集』や『草書千字文』などの遺黙の木板がある。典祀庁は、享礼の際に祭需を備えるところである。繫生碑は、享祀に供物として使う家畜を縛っておく碑で、背面の書院廟庭碑は淵斎宋秉璿が撰んだ。

筆巖書院の古文書と記録文化

筆巖書院には様々な古文書が所蔵されており、そのうち重要な資料は宝物第587号に一括指定され管理されている。現在、書院内の遺物展示館では金麟厚の遺品と文集、書院所蔵書籍と木板、古文書など書院の歴史が知られる様々な資料が観られる。

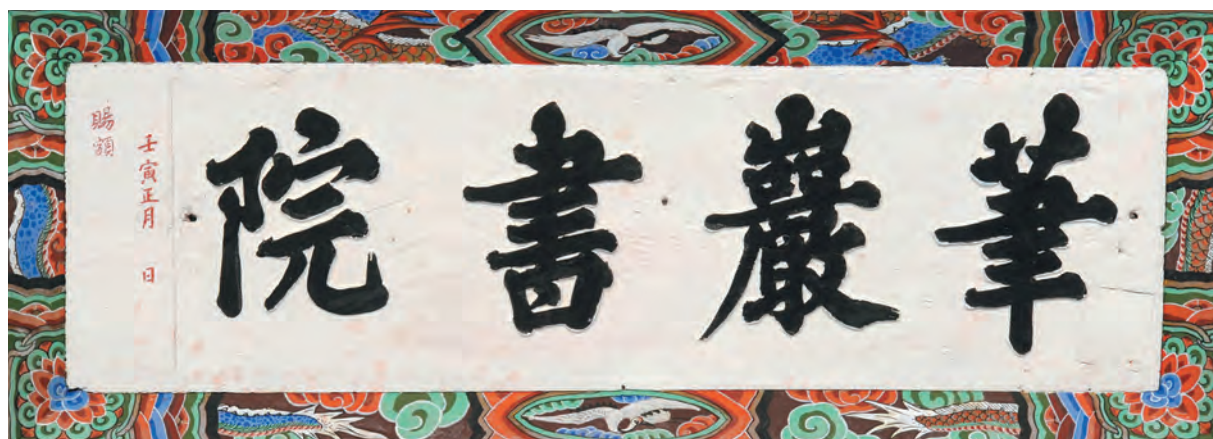
筆巖書院の文籍としては『奴婢田沓案』など財産関連文書が4冊、一般古文書が64枚、そして歴代院長、教官、講義参加者、講会参加者、儒生、訪問客の名簿である『院長先生案』、『筆巖書院執綱案』などがある。そのなかで財産関連文書の4種である『筆巖書院院籍』、『奴婢田沓案』、『奴婢譜』、『奴婢案』などを含む冊子形態の古文書14冊と古文書64枚は史料的价值が非常に高く、宝物第587号に指定されている。それは17世紀後半から19世紀にかけて作成され、朝鮮後期の一般的な財産であった書院田はもとより奴婢、保奴、書斎儒生らから取立てた物品の内訳が書かれており、書院経済の具体的な財政状況が見出せる。儒生の名簿が書かれている『筆巖書院院籍』は、それぞれ1708年、1717年、1742年に作成されたもので、収録された人の数が830人に達する。一方、筆巖書院の多様な資料の中で最も興味深いのは、1745年に作成された「奴婢譜」で、この文書は筆巖書院に所属する奴婢とその子孫の人的事項が系譜形式で記るされたもので、ほぼ唯一の資料である。

この他にも「奉審録」は1624年から1701年まで筆巖書院を訪れた訪問者の名簿であり、これを通じて17世紀に筆巖書院を中心として広がった人たちの交流を一目で調べられる。一般古文書のなかでは稟目が34件で最も多く、その他牒呈が14件、所志類が10件、完文が4件、帖文が2件、訓令が1件などである。

金麟厚と関わった資料としては契会図(蓮榜同年一時曹司契會契会図、1542年と同湖契会図、1545年)が2点、贈職と諡号の教旨が8点、署経状(司憲府と司諫院)が2点、文廟配享教書などの教書が3点、息子と孫の教牒が2点、文廟配享上疏文(沈翼賢、1789年)、致祭文(1786年、1786年、1796年、1828年、1855年)が5点、申欽(1566～1628)が撰んだ服斎傳筆歌并序文、仁宗大王黙竹図[木板本]、兪肅基の御化墨竹跋文(1736年)など31点がある。

木板は金麟厚の文集木板で、初刊本の木板が1枚、重刊本の木板が258枚、三番目の木板が391枚で計650枚が残っている。そして1610年(光海君2)に刻まれた「草書千字文」18枚と「武夷九曲」18枚、1568年(宣祖1)に刻まれた『百聯抄解』13枚と『遺墨』4枚、そして1568年と1770年(英祖46)に刻まれ仁宗が金麟厚に下賜した黙竹図板3枚が伝わる。

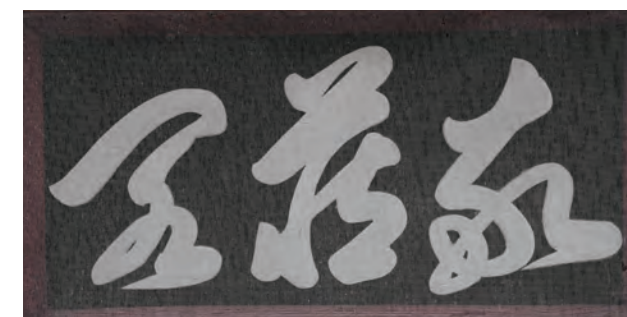
懸板類は43件が調査された。建物の扁額が11件、学規が1件、記文類が5件、題詠類が13件(16題16首)、書簡類が1件、教書類が4件、祭文類が2件、執綱名録が3件、石刻が1件、国國忌板が1件、書道刻字が1件である。



華嚴書院 1662 (顯宗3) 54.0X148.0



清節堂 17世紀後半 54.0X146.0



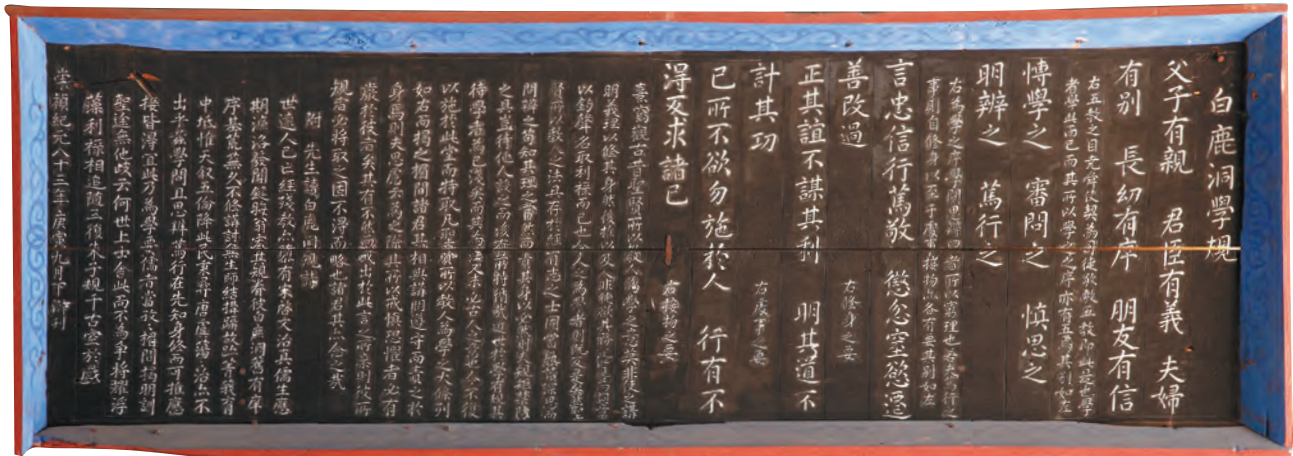
敬藏閣 18世紀末 46.0X88.0



祐東祠 未詳 47.0X111.0



廓然樓 18世紀末 46.0X88.0



白鹿洞學規 1710 70.0X211.0



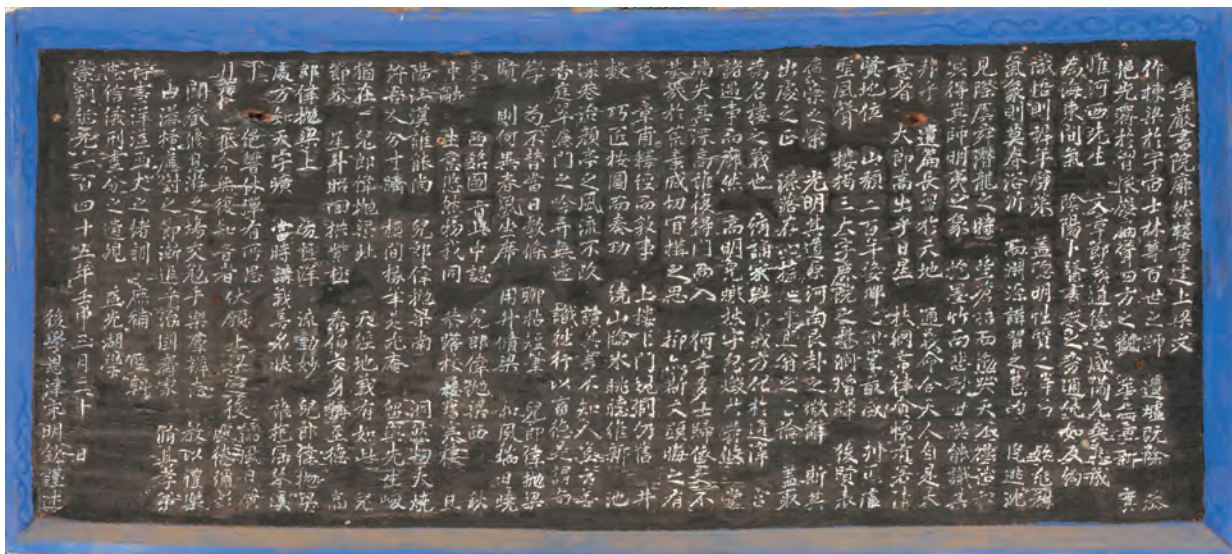
文廟從祀教書·文廟陞配祝文 1796 (正祖20) 41.0X100.0



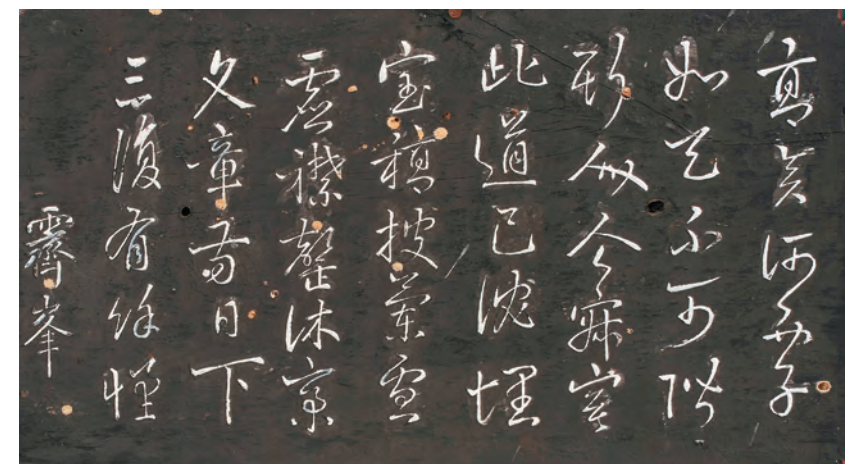
文廟從祀頌教文 1796 (正祖20) 41.0X100.0



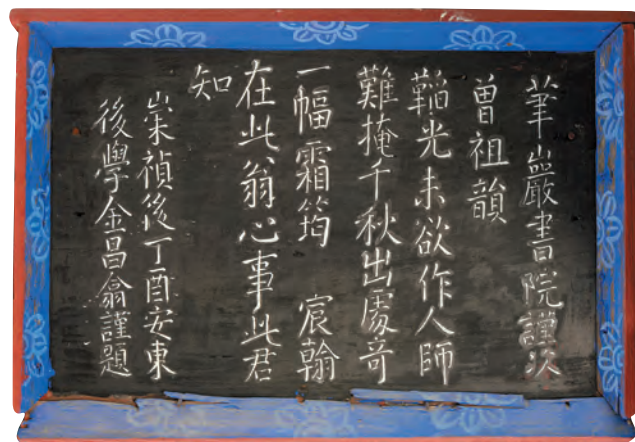
廓然樓記 1760 (英祖36) 41.0X100.0



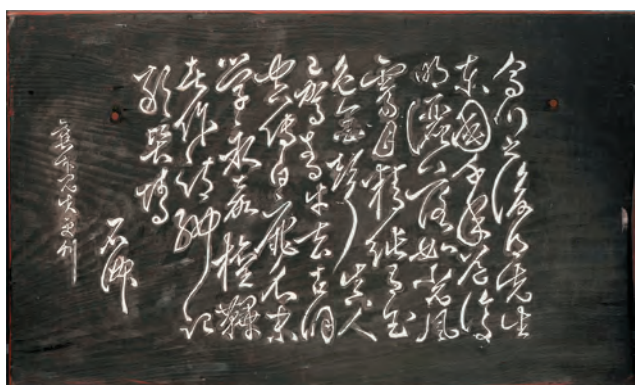
筆巖書院廓然樓重建上樑文 1752 (英祖28) 42.0X93.0



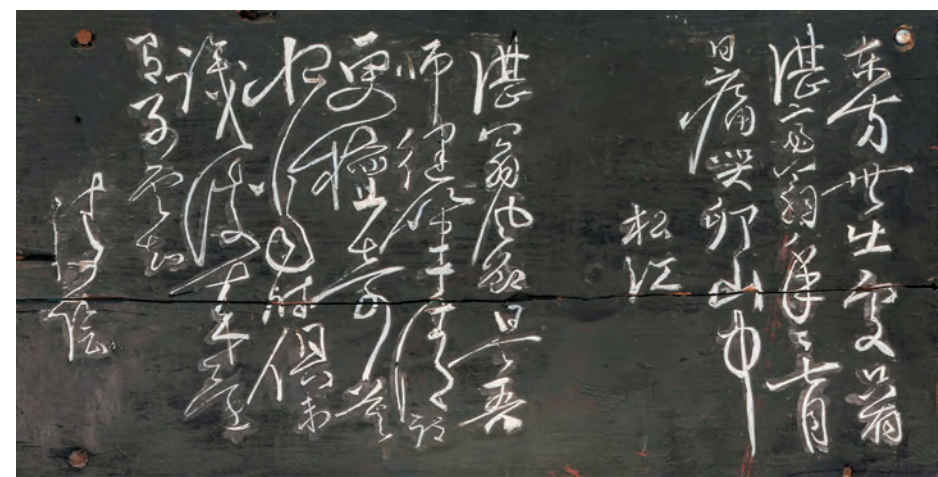
讀河西集 16世紀 22.0X40.0



筆巖書院謹次曾祖韻 18世紀 31.0X79.5



筆巖書院謹次曾祖韻 18世紀 30.0X51.0



懷河西/龍山雜詠 河西先生 16世紀 24.0X45.0



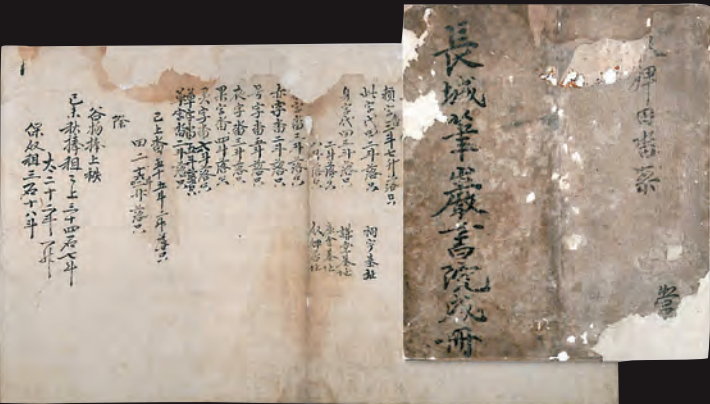
奉審錄 1624-1701 46.1X29.5 (2冊)

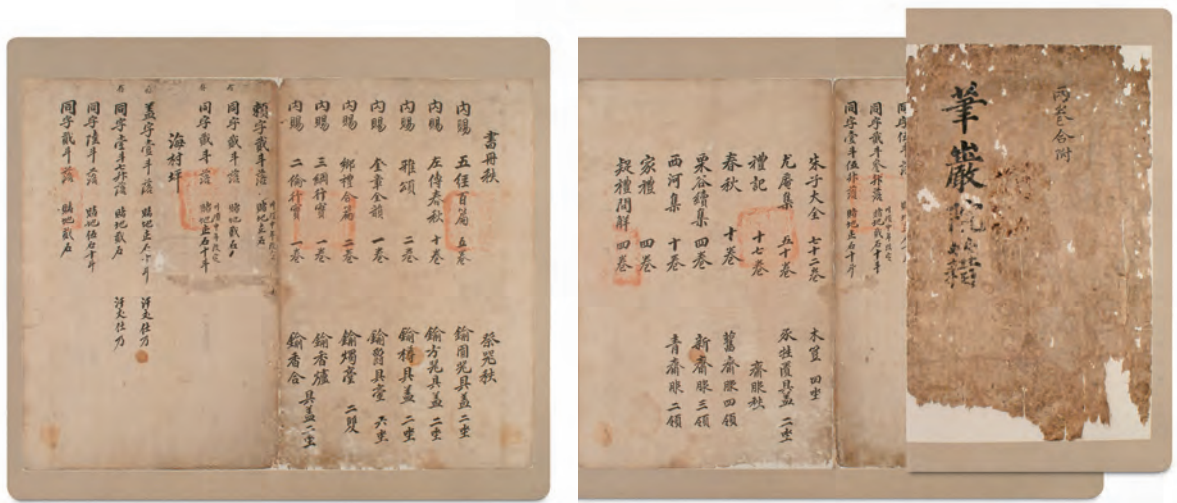


文契案 1678 32.3X24.0 (1冊7枚)



筆巖書院成冊 1680 (肅宗6) 29.6X25.5





筆巖書院院籍 1708-1742,1802 45.5X27.2 (4冊)



筆巖書院執綱案 1752-1887 27.5X31.9 (1冊19枚)



筆巖書院 院長先生案 朝鮮後期 43.3X29.7



奴婢譜 1745-1802 7.0X31.3 (1冊19枚)



奴婢案 1846 33.7X29.2

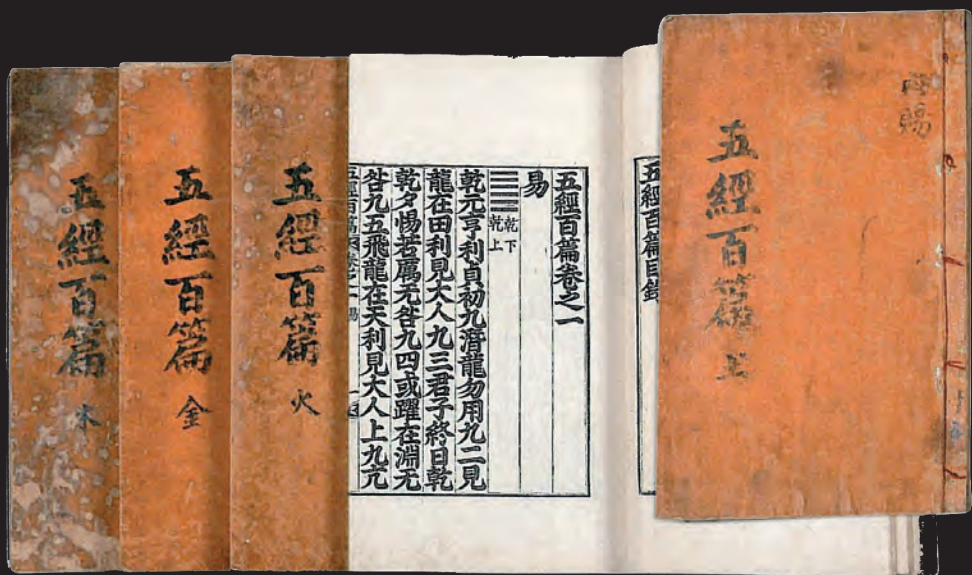


墨竹圖板 3板 1568 (宣祖1) 97.5X62.3 (3板)



河西先生集 1686 (肅宗12) 26.4X19.0 (7冊)





五經百篇 1797 46.1X29.5 (5冊)



河西先生全集 冊板 1568-1802 53.0X20.5 (重刊本基準650枚)



百聯抄解 16世紀後半 27.8X17.7 (13板)



草千字文 冊板 1610 (光海君2) 25.0X66.0 (18板)

祝文作成



陳設を確認する點視



香を薫ずる焚香礼



初献献爵



飲福受胙礼



配享位 読祝



講会



祭物を配る分脯礼



自然地形を利用して建てられ建築配置に優れた

達城 道東書院

- 所在地：大邱広域市達城郡求智面求智西路726
- 創建年代：1568年(宣祖1)
- 賜額年代：1573年(宣祖6)、再賜額1607年(宣祖40)
- 国家指定：史跡第488号(2007.10.10)



道東書院は書院教育の具体的な様相を立証し、傾斜地を活用した書院の建築配置を卓越に具現した。建築物ごとに複数の段を造り、外部の自然景観を視覚的によく受け入れるようにしたことから、傾斜地書院の造成技法が確認できる。

主享人物：金宏弼(1454-1504)

道東書院は、位置と景観から自然と調和した韓国書院の特徴を代表し、傾斜地の地形条件を最大限に生かし、祭享―講学―遊息空間を一直線の軸に位階的に配置した書院建築配置の卓越性を現わす。講堂の基壇部の芸術的具現、最小規模の芸術的計画、土塀など景観と性理学建築の美学が完成されている。

道東書院は、大邱・星州を中心とする慶尚道中部圏を代表する書院として、郷村問題または土林の共同の関心事に主導的な役割を果たす位置にあった。

道東書院の講堂及びと牆垣は宝物第350号に、2007年10月には書院全域が史跡第488号に指定された。現在、道東書院は立地と景観、そして建築から韓国の書院を代表するところと評価されている。

道東書院と寒暄堂金宏弼

士林教育の活動の象徴である金宏弼(1454-1504)を祭享する道東書院は、1568年(宣祖1)に金宏弼の故郷である玄風に、郷中の士林らによって建立された雙溪書院がその全身である。1573年(宣祖6)に額を賜ったが、壬辰倭乱で書院が消失された。1604年(宣祖6)に甫老書院と改名し重健して1607年(宣祖40)には‘道が東へ来た’という意味の道東と再び額を賜った。1610年(光海君2)には金宏弼の位牌が奉安された、1678年(肅宗4)には書院の重建に大きな役割を担った鄭述が追配される。

道東書院に祭享された寒暄堂金宏弼は、15世紀後半の士林派を代表する人物で東方五賢として文廟に配向された。朝鮮の性理学的嫡統を受け継いだ道学者として評価されており、退溪が寒暄堂に対して‘先生の道学の淵源は、実際に後学が敢えて推測することではない。断然、近世の‘道学之宗’と言うべし’と述べたことからその位相が知れる。特に、彼は小学の教育の普及と趙光祖・金安国に代表される中宗大改革政治の主役の排出に重要な役割を担った。

1610年(光海君2)、文廟に配向されるとき、東方五賢の首賢の席に位置されることで、朝鮮性理学の嫡統を受け継いだ人物と確定されたが、そこからも彼が配向された道東書院の歴史的位相の高いことが見出せる。

一方、共に祭享された寒岡鄭述(1543-1620)は、金宏弼が残した実践道学を道東書院に具現した人物で、退溪後の嶺南学派を代表する学者である。彼の金宏弼に対する継承意識は年譜、祀宇録、景賢統録の編纂、星州にある川谷書院の運営、道東書院の重建などと多様に観られる。特に彼は道東書院の重建過程で経済的支援、奉安文の撰述、退溪の字を集字した懸板の製作など、道東書院の権威と金宏弼の学問的位相を高めるのに力をつくした。

道東書院の景観と懸板

道東書院の建築構成は、前底後高の傾斜地をもとにする書院構成の典型を示している。したがって、建物の間の位階が明確であり建物の配置の軸が明瞭である。道東書院は後には代尼山があり前には洛東江が流れる背山臨水の立地条件に沿って東北向きをしている。からっと開けた景観を書院の領域に引き入れるのに非常に良い条件が整えている。

道東書院は、講堂の中正堂と門樓の水月楼から前の川が眺める江景立地を芸術的に昇華させて、江景から自然親和的立地を建築的に完成させた事例である。

また、道東書院は傾斜地という地形条件を活用して築台を築き層位を作り、その上に建物を配置した。水月楼に代表される遊息空間、講堂と東・西斎からなる講学空間、祠堂が位置する祭享空間が位階に応じて、‘前底後高’した地形の上に楼閣―中門―講堂―内三門―祀宇が軸線に沿って順次に配置されている。

祀宇には金宏弼の位牌が中央に祀られ、鄭述の位牌はその左側に配享されている。書院の中心空間である講堂の中正堂は中と正を、東斎の居仁斎と西斎の居義斎では仁と義を表象している。これは‘聖人定之以中正仁義而主静　立人極焉、つまり聖人は中・正・仁・義というものを立て、人間としていかに生くべきか(人極)は静を主とする。’との周敦頤の太極図説からとったものである。

中正堂の正面と内側の正面には、2つの道東書院の懸板が掲げられている。前面の書院懸板は李滉の字を模刻したもので、鄭述が懸板を掲げた理由を記し、内側の正面に掲げた賜額懸板は慶尚道都事であった裴大維の字である。講堂である中正堂の懸板は奉朝賀であった李觀徴の字であり、講堂の壁面には肅宗の傳教をはじめ、玄風の学者らには金宏弼の学問を世上で旨とすると詠んだ慶尙監司であった‘金安国の詩板’と‘白鹿洞規’、‘國忌’、‘書院規目’などが掲げている。

中正堂の基壇部には他の書院とは異なり、亀、竜などが彫刻されており、煉瓦にも様々な模様がを挿入され過度に精製された書院建築を補完するための創造的な装飾技法が確かめられる。基壇は下側の址台石と中央の面石、上側に薄く積み重ねた甲石からなる。面石は大きさと色の異なる石を互いにかみ合うように整えて築き、面石の間には如意宝珠と魚を加えている4つの竜の頭が突出されている。また石築には、細虎と呼ばれる一本の花とともに栗鼠状の彫刻もある。宝物第350号に指定された書院の垣牆は美しい土壁の垣である。

所蔵古文書と典籍、冊板

道東書院の所蔵資料には、古文書と典籍、冊板、懸板・記文などがある。古文書類は、書院の創建事実と組織及び運営、経済的基盤、郷村社会との関係が分かれるもので、いずれも105種215件が残されている。

書院の初創期の歴史が把握できる『道東重勦事蹟』は、書院の重建当時から1720年までの院生らが地方官・各処の校院などに送った上書・通門などと奉安時祭文、招待院長薦案などを纏めたもので、書院の重建初期の文籍が時間が経つにつれて毀損されるとそれを収合し戊戌年に再正書したものである。

書院の人的構成と組織・運営体制に関する資料は『院任案』(1冊)、『入院録』(2冊)などをはじめ、『参祭録』(8冊)、『謁祠録』(24冊)、『焚香録』(1冊)、『敦事録』(2冊)、『尋院録』(22冊)などがあるが、他の資料に比べて比較的よく保管されている。

経済に関する資料は『土地案』、『奴婢案』、『院属案』などと所属産職に対する書院への金物の納付状況が記された重要な資料の『月次鉄物録』、また『正案』(17冊)、『別補正案』(11冊)、『屯租記』(7冊)、『賭地冊』(5冊)などが所蔵されており、書院経済の具体的な財政状況が調べられる。

教育に関する資料には『育英斎完議節目』や『学楔案』などがあり、道東書院の出板文化の断面が確かめる『景賢録』』の新・旧板と『佔畢斎先生門人録』など計8種が確認される。

道東書院では、祭享の手続の一つとして陰福礼である餽礼を厳格に行う。餽礼は、享祀を終え神が歆饗された供物をすべての祭官が分けて味わい、神の功德を褒める儀礼で、書院の享祀として餽礼が最も完璧に残っているのが道東書院である。

笏記¹⁾に応じて行われるので、儀式が厳粛であるだけでなく、祭官の皆が巡杯するため時間も多くなる。巡杯する順番も他の書院とはかなり異なる姿を見せており、これを通じて尊賢意識と礼学思想が伝承できる良い模範となっている。また道東書院は、近隣に金宏弼の墓所があり、墓祭と書院の祭享を結合させた唯一の書院でもある。道東書院の有司らは、春秋の享祀のほか、旧暦10月2日に主享である金宏弼の墓から墓祭を行う。

1. 婚礼・祭礼の式次第を書いた記録。



道東書院 1607 (宣祖40) 40.0X160.0



道東書院 17世紀初 40.0X160.0



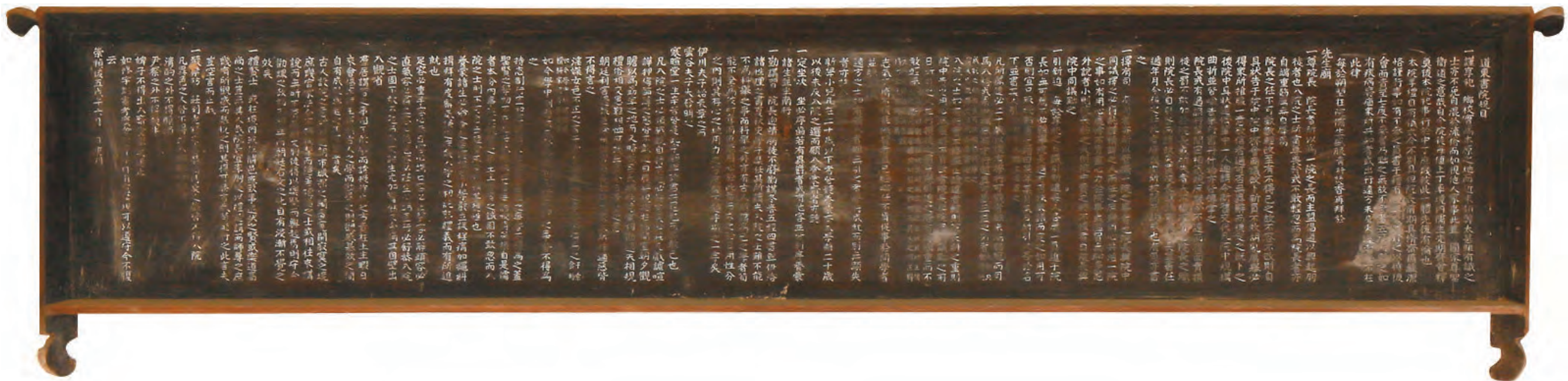
中正堂 17世紀後半 40.0X160.0



喚主門 16世紀 40.0X160.0



水月樓 1849創建/1974重建 40.0X160.0



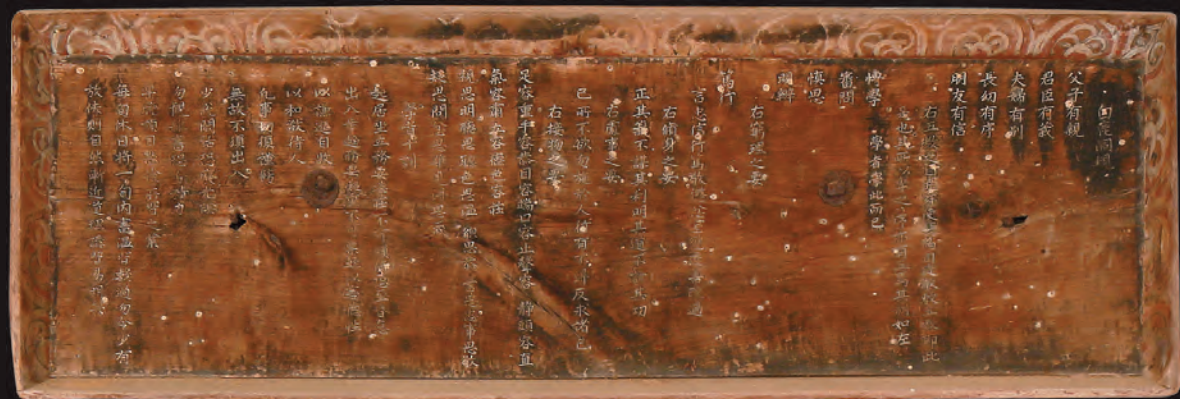
書院規目 1918 52.0X210.0



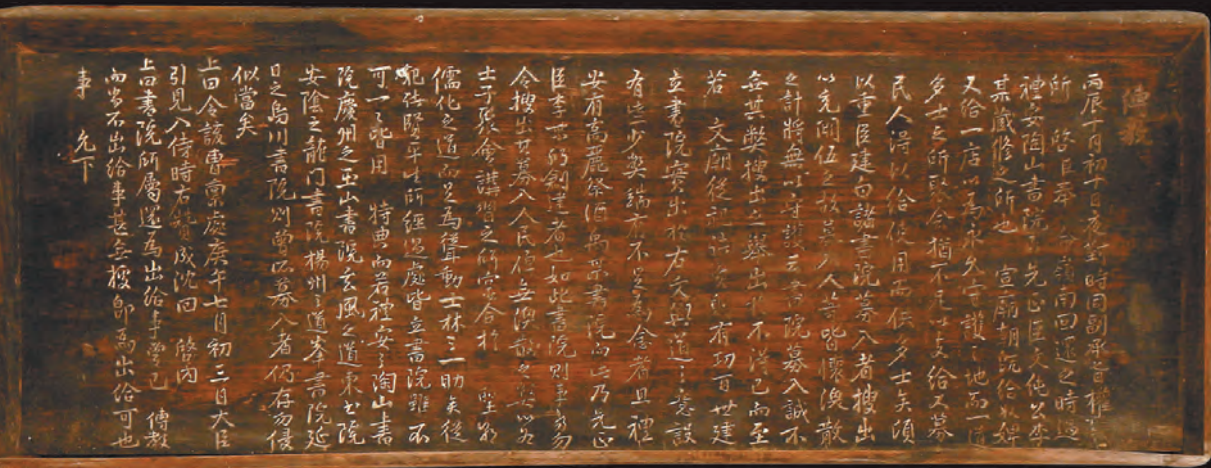
書道東書院額板下 1607(宣祖40) 98.0X250.0



水月樓上梁文 1849(憲宗15) 55.0X136.0



白鹿洞規 未詳 39.0X120.0



傳教 16世紀 40.0X160.0



道東書院 重創事蹟 1604-1720 36.5X22.5



入院錄 1610-1907 44.6X26.6



奉安時諸執事分定記 1610-1803 34.0X23.3



奴婢案 17世紀初-1702 33.5X23.0



參祭錄 1611-1651 24.8X20.1 (8冊)



育英齋完議節目 1787-1789 35.0X24.0



月次鉄物録 丙辰年-己卯年 22.2X21.0 (1冊)



重修物力都摠 1803 (純祖3) 34.7X23.0, 33.0X28.3



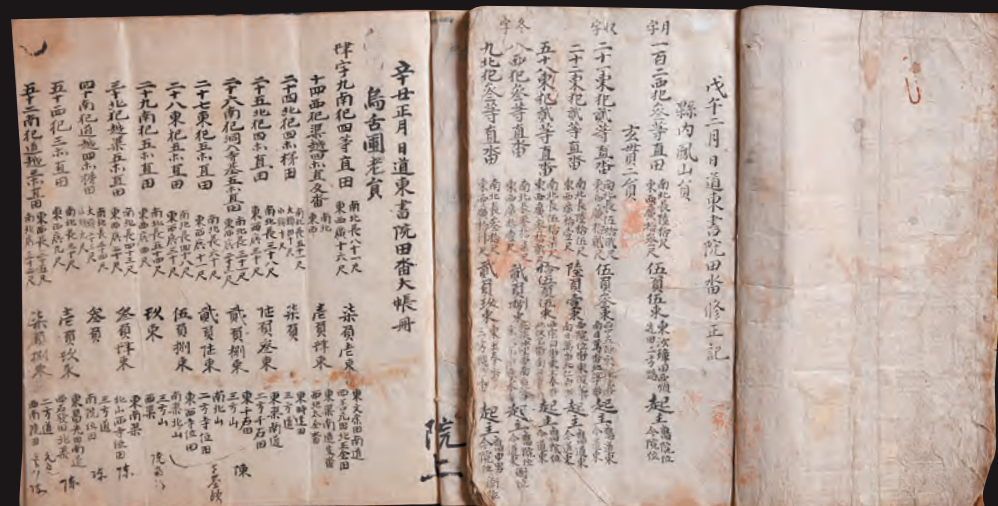
学稷案 1854-1867 32.0X29.0



道東書院 院生案·募入案·資備案 19世紀以後 35.6X29.0 (12冊)



東書院田畝大帳 1661 35.5X31.5



道東書院田畝修正記 1678 (肅宗 4) 36.0X21.5

講堂で分定礼をする祭官



犠牲の状態を調べる省牲壇



簠



簋



犧罇



象罇



道袍



東門からに入り東門に出る献官



読祝



祝文と幣帛を燃やす望燎礼



主享位墓祭



祭祀の供え物を味わう餽礼



教育機関から世論収斂処への役割が拡大された

安東 屏山書院

- 所在地：慶尚北道安東市豊川面屏山ギル386
- 創建年代：1614年(光海郡5) 屏山書院建立
- 賜額年代：1863年(鉄種14)
- 国家指定：史跡第260号(1978年3月31日指定)



屏山書院は、書院を教育機関のみならず万人疏など士林の公論場にも拡大された士林活動中心地としての書院の機能を立証する。多くの学者たちの受け入れが可能な大きな規模の対峙は自然景観との調和が優れている。

主享人物：柳成龍(1542~1607)

慶北安東の屏山書院は1614年(光海君5)に地域の士林によって建立され、万人疏の作成など公論場としての書院の役割を实践した場所であり、自然と調和した晩対楼という楼を通じて韓国書院における楼閣建築の卓越性を見せる。朝鮮の文臣であった柳成龍と息子の柳袞が祀られている書院で、1563年(明宗18)に建てられた豊岳書堂がその全身である。領議政を歴任し、壬辰倭乱の時、戦時の政局を主導した柳成龍が亡くなると、弟子の鄭経世と地域の儒林が彼の行為を称えるために書堂の後に尊徳祠を建て、1614年(光海君5)には屏山書院を建立した。尋いで柳成龍の息子である柳袞が祀られた1863年(鉄宗14)には額を賜り名実相伴う領南を代表する書院として位置づけられた。

屏山書院には書院の運営実態が見出せる多くの資料が所蔵されており、抜群の建築美を誇る古建物が原型を維持してあるため歴史的・文化的価値が非常に高い。また、絶景の屏山に面し、屏山書院を訪れる人々に美しい景観を提供している。

西厓柳成龍

屏山書院は学者であり政治家である柳成龍(1542~1607)が祀られている書院である。柳成龍は16世紀後半の領議政・都体察使として壬辰倭乱に優れた功を奏した人物である。幼い頃から神童と評価され成長しては永南学派の巨頭であった退溪李滉の門人となった。柳成龍は壬辰倭乱を経験しながら官僚としての能力を十分に発揮した。その中でも井邑縣監であった李舜臣を全羅道左水使と破格的に薦挙したのは、彼が持っている用人術の白眉といえる。1592年に戦争が勃発すると柳成龍は都体察使と領議政を兼任した。戦乱中に政敵の攻撃を受けて免職されたこともあったが、百尺竿頭に攻められた国を守るために戦時政局を主導していき、人々から‘一人之下万人之上’という評価を受けることとなる。学問研究も怠らずいくつかの著書を残したが、このうち『懲毖録』は壬辰倭乱を調べるのに欠かせない貴重な資料である。

一方、柳成龍とともに屏山書院に祭享された柳袞(1582~1635)は、柳成龍の三番目の息子である。高官大爵には歴任されなかったが、名相学者の末裔らしく誠実な生活で称賛を受け、父親の学問的業績を後代に受け継いだ。柳袞の学行を聞いた政府は、彼を遺逸として薦挙したこともある。このような業績により、死後に父親の位牌が祀られた屏山書院に祭享されることとなった。

景観‘屏山’と書院の建物配置

屏山書院は花山を主山とし、その山の裾に南向きに位置している。書院の前には洛東江が東から西に流れ、その向かい側には屏山が書院と向かい合っている。河回村を回り流れる洛東江には九曲園林が名高いが、これを‘河回九曲’と呼ぶ。まさに屏山はこの‘河回九曲’の始まりとなる第1曲にある。河回九曲のかしららしく屏山書院の景観はどの書院よりも秀でる。

書院の前に広い白い砂浜が広がっており、洛東江が緩りと流れている。そして、川を渡ると屏風のような屏山が向かい合っていて見る人々を圧倒する。屏山書院の楼閣である晩対楼に上がれば絵のような屏山の景観を一目で鑑賞でき、朱子の武夷九曲と武夷精舍の後にある屏山を思い浮かばせる。

屏山書院は、後ろにいくとますます地形が高くなる前底後高の傾斜地に位置しており、このような周辺の山水と地形地勢とよく合うように祭享・講学・遊息が調和を成す空間構成を採っているが、祭享機能を持つ建物が一番後ろに配置され、その前に講学空間を配置した典型的な前學後廟・上廟下学の配置をなしている。

屏山書院の祭享空間として祠宇の尊徳祠と典祀庁がある。尊徳祠には柳成龍と柳袞の父子の位牌が奉安されており、尊徳祠の前には闇を明かす庭療台がある。講学空間は講堂である立教堂、学生らの寮である東齋の東直齋と西齋の靜虚齋、そして立教堂の後の冊板と遺物を保管する蔵板閣で構成されている。このなかで講堂の立教堂は、屏山書院の中心となる建物である。立教堂に上がれば楼閣の外に展開される洛東江と屏山が眺望できる。

楼閣の晩対楼は、遊息空間を代表する。‘晩対’は唐の杜甫の詩‘白帝城楼’の中にある‘翠屏宜晩対、つまり青い絶壁は、夕時に向かい合うのがいいものである’から取ったもので、晩対楼から眺める屏山と洛東江は絶景といえる。ここで儒生たちは遊息し詩會も催した。屏山書院のこうした空間構成と建物の配置は、祭享・講学・遊息が調和し、これを通じて自然と人間が一つになる‘天人合一’の理想を目指している。

屏山書院の堂号に寄せられた意味

書院は学問の真理を探求する空間である。屏山書院に配置された建物の堂号は、真理を探し求める儒生たちの心と理想が込められている。外三門から祠堂まで真理探求の過程が含まれているのである。

屏山書院の外三門である復礼門は、『論語』の‘克己復礼為仁’から取ったもので、東・西斎の東直と靜虚に含まれた私欲が捨てられる内面の心の勉強、すなわち克己復礼の仁をなす修養を通じて聖賢となる教えを行う自己節制の心構えが強調されている。

屏山書院で最も有名な晩対楼の前には絶景の屏山が広がっており、杜甫の詩‘白帝城楼’の‘翠屏宜晩対’からその名前を取った。朱熹も武夷精舎の景色を描いた‘武夷雜詠’の‘晩対亭’で‘倚筇南山領 却立有晩對 蒼峭矗寒空 落日明影翠 ’と詠んだ。夕日が屏風のように広がった崖を斜めに照らす姿で、杜甫と朱熹は山の生気をより鮮明に感じたと、それを屏山書院でも同じく感じることができる。

講堂である立教堂は、儒生たちが学べねばならない聖賢の教えを正立させるという意味で、入教堂の左側には敬義斎、右側には明誠斎と名付けられた部屋がある。敬義斎は周易の‘敬義立而徳不孤 ’から取り、常に目覚め慎みながら義を重視するという学問の姿勢が強調されている。明誠斎は書院の院長が寄居していた部屋であるが、明誠は中庸の‘誠則明矣 明則誠矣’から取り、屏山書院で勉強する儒生たちの究極の目標としたものである。入教堂の前には書院の儒生が寄居する東斎の東直斎と西斎の靜虚斎がある。‘東直’と‘靜虚’は、私欲が捨てられる侮辱を捨てる克己の修学を通じて仁をなす意味が含まれており、儒生たちが学びに至るまで必ず持たねばならない重要な心構えを指す。

屏山書院の最も高いところに、先賢の位牌が祀られた祠宇が位置しているが、その堂号は尊徳祠である。‘尊徳’は、屏山書院の儒生たちに先んじて真理を探求した柳成龍・柳袵の父子の徳を崇めるために付けられた堂号である。

‘公論’の場、屏山書院

朝鮮時代は性理学的名分をもとにした公論政治が標榜された。公論の主体は地域の士林であり、書院はそのような公論が結集され議論される非常に重要な場所であった。屏山書院は韓国書院の発展過程で公論場へと拡張された特別な事例として選ばれる。屏山書院はそうした公論の場として有名だったところである。国の重要な政治的議論があるたびに、嶺南士林は屏山書院を中心に公論を結集させたが、屏山書院は韓国で初めて数千人が連名した上疏をあげた書院であり、地域の公論を形成して総合し産出す公論場の機能を積極的に行った。屏山書院に所蔵された多様な古文書からは、屏山書院が地域の公論を集め合わせ調整していった様子が見出せる。

‘晦退辨誣疏’と‘服制疏’がその代表的なものである。1611年、北人の政権は文廟に配享された晦斎李彦迪と退溪李滉の位牌を撤享しようとする動きを見せ、多くの士林が反発した。この時安東圈の儒林たちは撤享に反対して‘晦退辨誣疏’を上げたが、この上疏に反映された‘公共之論’の結集場所がまさしく屏山書院の前身である屏山書堂であった。

また、顕宗の年間に複製問題をめぐり西人と南人の間に広がった礼訟論争の時も屏山書院は公論の場となった。礼訟論争が起ると、全国の士林は自派の立場を支持するために上疏を上げた。この時上げられた南人士林の上疏文の中で最も代表的なのが、屏山書院を拠点として推進された‘服制疏’である。柳元之と柳世哲の主導で屏山書院に疏牒が設けられ、その上疏に連名した士林の数が一万を超えた。これは従前のどの上疏文よりも規模が大きかったもので、代表的な‘公論’の場となった屏山書院の社会的地位がそこから確かめられる。

典籍、冊板、古文書

屏山書院に所蔵されていた記録物は、2004年に河回村にある柳成龍の宗家である忠孝堂の遺物展示館の永慕閣に移転され、また韓国国学振興院に移された。本来の古書は、書院の講堂である入教堂の右側にある書斎の蔵書室に保管されていた。1969年には屏山書院に所蔵されている典籍が1,071種3,039冊であると調べられたが、経書が71種、歴史が52種、伝記が174種、儒家が54種、天文が3種、醫家が4種、道家が1種、類書が8種、文集が693種、その他が11種であった。

記録遺産の中で最も注目されるのは主享者の柳成龍が書いた書物である。特に、国宝に指定された『懲毖録』と宝物に指定された『乱後雜録』、『辰巳録』、『軍門謄録』などは、壬辰倭乱の当時、領議政と都体察使などを歴任した柳成龍が戦乱の時に経験した事件や軍事政策などを収録した資料として、壬辰倭乱研究に重要な歴史的価値を持っている。

屏山書院の冊板は計25種1,907枚が伝えられている。このなかで西厓柳成龍の著述と文集で、『懲毖録』244枚、『西厓先生文集』の旧板46枚と新板418枚、『西厓先生別集』の旧板11枚と新板83枚、「西厓先生年譜」の旧板18枚と新板74枚がある。そして西厓の息子の柳袞の『修巖先生文集』67枚、『修巖先生年譜』31枚、『修巖集』48枚、西厓の孫の拙斎柳元之の『拙斎先生文集』183枚、西厓の6代孫の柳㐾＋奎の『臨汝斎先生文集』224枚、西厓の問人で屏山書院の創建を主導した愚伏鄭經世の『愚伏先生年譜』49枚も注目される。

このほかに、『陶山及門録』など退溪と関連された木板と、『童蒙須知』、『聖学十図』などの木板と、反対派の攻撃で西厓柳成龍が罷職される危機に瀕したとき西厓を擁護しながら破職が不当であることを論破した梧里李元翼の『梧里先生文集』140枚、別集48枚、続集98枚、筆帖2枚の冊板も安東をはじめとする嶺南の儒林らによって作られ、屏山書院に保存された。

屏山書院の古文書資料としては、書院運営指針を収録した『院案要覧』3冊と、『屏山書院記事』などをはじめとする18種の冊子形態の古文書は教育的機能を中心に置いた屏山書院の性格を示すものとして、書院の教育的機能に関する資料として残られている。その中で、「居斎案」や「講案」などは、書院で学習する院生の面貌や評価方法などを示す資料である。「居斎案」は1781年と1782年の講学記録であり、「講案」は1789年の講学記録である。「居斎案」は、講学した書冊と参加した儒生の名前を記録した「辛丑通読案」と「辛丑壬寅居斎案」からなっている。「講案」は儒生を評価した考講の記録である。上記の2つの資料には、屏山書院での輪読学習と似た‘通読’、寄宿して学習する‘居斎’、学習能力を評価する‘考講’が行われたことがわかる。1年の中に特定した期間を定め、学生らに宿泊を提供し集中的に講読する形で教育活動が展開されたのである。



屏山書院 1863 (哲宗4) 78.3X226.0



尊徳祠 未詳 82.0X171.0



動直齋 17世紀前半 40.0X91.0



靜虛齋 17世紀前半 38.0X87.0



復禮門 17世紀前半 67.0X183.0



晚對樓 17世紀前半 78.5X202.0



屏山尊德詞復享記 1630 (仁祖8) 50.0X132.0



院任錄 1592以前-1807 (4冊) 27.0X23.0



執事錄 1614-1639 26.5X29.5 (1冊)
1658-1664 23.7X22.5 (2冊)
1666-1698 21.5X24.0 (3冊)
1723-1735 27.5X21.5 (4冊)



奉安錄 1610-1614 39.0X24.5



入院錄 ?-1718 33.0X20.0



院奴婢推刷案 1663-1762 (7冊) 27.5X20.5-31.0X19.0



屏山書院延額時事實 1863 (哲宗14) 31.5X28.0



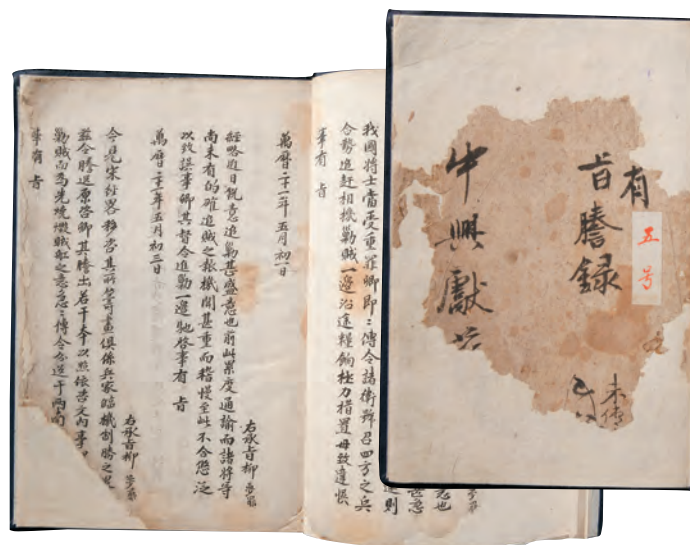
居齋案 1781-1792 31.0X21.5



講案 1789 (正祖13) 31.0X21.0



院案要覽 1841 (1冊) 28.3X20.0
1853 (2冊) 30.0X21.0
1883-1896 (3冊) 30.3X22.3



中興獻芹 1593 (宣祖26) 35.0X23.0



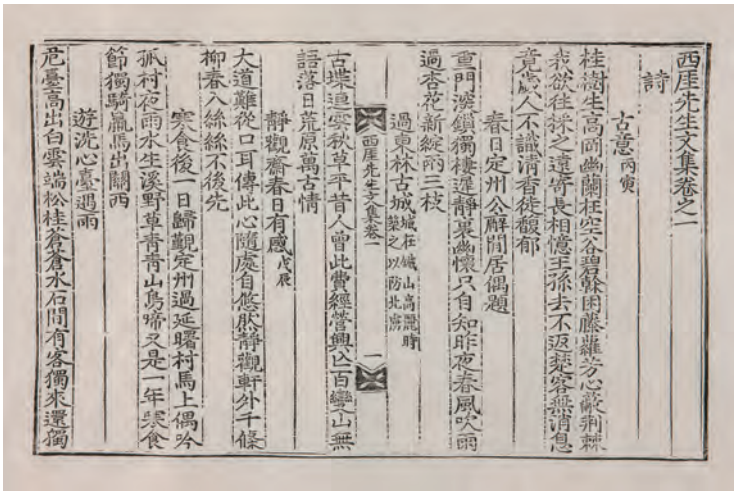
辰巳錄·實後雜錄·軍門騰錄 17世紀 宝物 第160号 辰巳錄 30.5X21.0
實後雜錄 38.0X25.0
軍門騰錄 35.0X28.5



德愍錄 国宝 第132号 17世紀 25.0X28.0



德愍錄 冊板 未詳 21.5X35.0



西厓先生文集 冊板 1633 (仁祖11),1894 (高宗31) 27.5X54.0



西厓墨蹟 冊板 1607 (宣祖40) 27.5X54.0



陶山及門錄弁訂 冊板 1913 19.0X32.5 (51枚)



修巖先生文集 冊板 1713 (肅宗39) 21.0X32.0



永慕錄 冊板 未詳 20.0X35.0



聖学十図 冊板 1916 64.0X104.0

官服



献爵の前に從享位に上香する分献官



行礼を評価する祭祀公論



祠堂の西の月台で祝文作成



祭物を確認する謹封儀礼



祭物を祠堂の中門から入れる時おじぎをする祭官ら



郷約を通じた郷村教化の場であった

井邑 武城書院

- 所在地：全羅北道井邑市七宝面武城里500
- 創建年代：1615年(光海郡7)
- 賜額年代：1696年(肅宗21)
- 国家指定：史跡第166号



武城書院は、韓国の書院の発展過程において性理学の理念が地域単位の知識人集団を中心に社会全般に拡大する段階に属する。性理学的社会秩序を構築し、郷村を教化しようと教育と社会的根拠地に設立された。

主享人物：崔致遠(857-?)

全北井邑の七宝面武城里500番地に所在する武城書院は、全羅右道の代表的な書院で、地方官として赴任して治績を成した人物と興学活動を繰り広げた地元の士林らが祀られた書院である。1615年(光海7)に泰山書院として規模を整えた後、1696年(肅宗21)に賜額を要請する上疏を上げて‘武城’と額を賜った。

武城書院は崔致遠という韓国儒学史の象徴人物が祀られた場所で、村の中の書院でありながら興学と教化の特別な伝統と性格を持つ。孤雲崔致遠をはじめとする地方官たちが礼楽から民を教化し、興学活動を繰り広げた地元の士林を讃える特別な書院であり、また韓末には、講学の伝統を強化し丙午倡義が行われたことなどが注目される。

孤雲崔致遠と生祠堂と泰仁興学堂

武城書院は韓国の様々な書院の中でも創建沿革と変遷過程で独特の特性を持つ。武城書院は、書院が建てられる由緒が統一新羅時代の孤雲崔致遠の興学活動から始まり、中央から派遣された地方官(守令)の興学と地域民に対する教化の功績、そしてその由緒の学堂(書堂跡)を讃えながら建立されたからである。

武城書院に主享に祀られる孤雲崔致遠(857~?)は韓国儒学史の象徴的な人物で統一新羅時代に唐に留学して官吏となり、特に黄巢の亂が起るとその有名な「討黄巢檄文」を題した天下の文章家としても名前を震わせた。泰仁の人々は、崔致遠が887年に泰仁郡守として赴任し、郡民を教化した‘絃歌之声’の儒風を百世に引き渡すために、現在の武城里にある城皇山の西尾根の月延台に生祠堂を建てて祀られたと伝える。

崔致遠の生祠堂は朝鮮時代に入り、泰仁地域の人である不憂軒正極人(1401~1481)が1483年に設けた‘郷学堂’と併された。1485年(成宗16)に今の位置に移られ昔の地名に沿って‘泰山祠’と祠宇の名前を変えた。丁克仁は朝鮮初期の儒学者で、万年に泰仁に居住しながら郷学堂を建て若い弟子たちを養成することに専念し、意志を共にする村の士人たちと郷飲酒礼¹を行ったことでも有名である。

武城書院の全身‘泰山書院’

宋世琳は1510年(中宗5)に講堂と東・西斎を建立し、他の地域で求め難しい書院の伝統を早期にこしらえた。こうした泰仁の興学的伝統は、県監の申潜によって再び蘇る。1543年(中宗38)に泰仁県監として赴任された申潜は、7年間再任しながら多くの治績を残した。特にこおりの東西南北の4カ所に学堂を設け、学問と興学の発展に寄与したことで有名である。申潜が移任されると、こおりの士林らが意志を集めて崔致遠の如く生祠堂を立て彼の功績を讃えた。

このように、武城書院は他の書院とは異なり崔致遠の生祠堂から始まり、丁克仁、申潜など地方官として留学の振興と興学の治績を残した人物が祀られた特別な書院であった。

1. 村全体の儒生が集まって村の規則である‘郷約’を読み酒を飲みながら供宴をもよおしたこと。

それから泰山祠は1615年(光海7)に至り規模を一新して書院として発展した。当時、泰山祠に祀られていた崔致遠と申潜を併せて祀ることで、祠廟の泰山祠と郷学堂が結合する特異な発展史をあらわしている。また1630年(仁祖8)には不憂軒丁克仁(1401~1481)、訥庵宋世琳(1479~?)、黙斎鄭彦忠(1479~1557)、誠斎金若默(1500~1558)、1675年(肅宗1)には鳴川金灌(1575~1635)を追配させ、崔致遠を主享として7位を祭享するに至る。彼らは皆、郷村教化と興学に特別な行跡を残した地域出身の人物である。

‘武城’と額を賜る

泰山書院は、1696年(肅宗22)について全羅道の儒生202人か賜額を請う上疏を上げて‘武城’と額を賜ることができた。

当時、請額上疏には、祠宇の創建からすでに100年余りが過ぎている点、そして崔致遠の文章や学業、宗廟配享をはじめ、申潜の興学行跡、丁克仁など郷賢たちの活動が書かれ、そうした先賢の行跡にもかかわらずいまだに額が賜れないことを総ての士林が憾んでいるので、特別に有司に命じて速やかに賜額させ、祠宇を輝かせられると請った。この上疏文は1696年(肅宗22)正月九日に肅宗に進達され、その年二月九日 ‘武城’と額を賜った。

‘武城’、‘絃歌’の意味

書院の額号である‘武城’は新羅時代において泰仁の地名でもあるが、孔子の弟子である子游が治められたこおりである武城と同じ名前でもある。これは『論語』の「陽貨」篇の、子游が魯国の武城県監になられ礼楽をもって民をよく治めていたが、孔子がそこを訪れると折しも絃歌が聞こえて弾復したという逸話と関連されている。泰山という昔の地名と祠宇の名前があったにもかかわらず、‘武城’と額を賜ったことと、‘絃歌之声’の逸話から名前をとった問楼の‘絃歌楼’は、この書院が邑の大きさにこだわらずその統治は礼楽からならねばいけないという孔子の教化思想を現わしている。心学も重要だが、それより興学と礼教を中心に置いたことを象徴する。

村の中の景観と簡潔な建築構成

武城書院の立地は、他の書院のほとんどが自然景観が秀でる処にあるのと異なり、村の真ん中をとっている。武城書院が位置した井邑市七宝面武城里は西北側に聳えている七宝山に寄りかかって形成された村である。まさにこの背山臨水形の形局の村の中心に武城書院が位置しているのである。

その一方で、書院の領域を広げず最小限の建築構成で品位を維持しており、建物が特に大きくも華やかでもなく純粹で質朴な姿をしている。武城書院の建築が持つこのような形式と形態から、書院が民たちに近づかねばならないという意味と、郷村民と共にしながら地域文化を先導し、知識人の社会的役割と責任を果たそうとする意味とが読める。

孤雲崔致遠の影幀と文集

武城書院の建立由緒が韓国儒学の道統といわれる孤雲崔致遠の生祠堂から始まったと前述したが、武城書院が発展しながら再び崔致遠と関連された特別な事情が作られる。つまり、武城書院には主享である崔致遠の影幀が所蔵されたのである。崔致遠の影幀は1784年(正祖8)に雙磎寺から移案されており、それに1834年には崔致遠の『桂苑筆耕集』が刊行されたところとしても武城書院は有名である。

崔致遠の影幀は雙磎寺に奉安されていたが、武城書院では崔致遠の影幀を奉安する前に祠堂を重修し、1784年に雙磎寺から崔致遠の影幀を移案させた。武城書院に所蔵された『重修日記』にはそれと影堂移建の過程が日記体として非常に詳しく記されている。1825年(純祖25)に武城書院の講堂が消失されると、泰仁県監である徐灝淳は孤雲の影幀が毀損されることを懸念して1831年に新たに改摹し(国立中央博物館所長)、1923年には韓末の著名な画師の蔡龍臣(1850―1941)によって再び改摹され、全北都立美術館に委託保管されている。

徐有桀は湖南觀察使として在職中の1834年に武城書院に拝謁したが、折よく洪奭周の家に所蔵されていた『桂苑筆耕』の旧本を見てはそれを校訂し全州で刊行したという。

韓末の丙午倡義と武城書院

武城書院は興学堂という書堂講学と郷飲酒礼・郷約の伝統が合わされ長い伝統が続かれた特別な礼教的意味も持っている。武城書院では、1872年(高宗9)県監の趙中植が院長を務め、毎年春(3月3日)と秋(9月9日)に講習礼を行うことを決議し、1873年から1880年までに郷飲酒礼2回を含め計20回の講習礼が開催された。

そして、このような講習礼の伝統と儒林講学の伝統が、丙午義兵につながったことでも有名である。崔益鉉と林炳瓚の丙午倡義の拠点がまさしく武城書院だったのである。崔益鉉(1833~1906)と林炳瓚(1851~1916)は、1906年6月4日に武城書院に集まり講会を開き、崔致遠の影幀を奉審した。そして、当時、書院の所任であった金箕述、柳鍾奎と共に講会に出席し、倡義討賊疏を上げた。講会が終わった後、80人余りの義士が倡義の旗幟をあげ、檄文を回して泰仁、井邑、順昌、谷城を占領したが、6月12日に淳昌で官軍の攻撃を受けて崔益鉉、林炳瓚など13人は捕まれてソウルに圧送され、監禁2年の宣告を申渡され、対馬へ流配された。東斎の講修斎の前にある「丙午倡義紀蹟碑」には、当時の情況が詳細に記録されている。

武城書院の古文書

武城書院には多様で特別な古文書がよく保存されている。これらの成冊古文は、古文の原本として武城書院の歴史と文化、活動の特性が示される資料として注目を集めている。これらの資料は賜額書院であり、全羅左道の首院として名があった武城書院の運営の姿と性格を示すことで時代が遡れる儒生案(院儒案、院生案)とともに、額を賜った過程を記録した延額記事、重修日記、そして完文・節目、尋院録と奉審録などからなる。

時代が最も早い武城書院の儒生案は、賜額以前の泰山書院当時の院生録2冊と武城書院と額を賜った後の院生録2冊で、1618年、1620年、1622年、1639年、1659年の5件の泰山書院の儒生案が保存されている。武城書院院生案も1773年と1800年の院生案、そして1801年の奴婢案と共に綴じれており、計7点の儒生案と1種の奴婢案が保存されている。

そして武城書院には、他の書院でが求め難しい『延額記事』の1冊が伝えられる。これは、武城書院の賜額に関する記録で、1695年の武城書院の請額疏から年額、幣物などの扶助記、建物の修理、位牌の還安などに関する諸般事項を非常に詳細に記録した貴重な資料である。そして『重修日記』の1冊は、1783年(正祖7)の孤雲崔致遠の影幀を奉安する前に祠堂を重修する過程で出捐した人名と、1784年に雙磎寺から崔致遠の影幀を移す過程までの影堂移建に関することが日記体として記られている。

一方、書院の運営と経済実像を具体的に著わす古文書として、武城書院の完文と節目が4冊に伝えられ、18世紀半ばから20世紀初頭に至る200年余りにわたって書院を訪ねて奉審した人名簿である『尋院録』と『奉審録』も5冊に伝えるが、これらの資料を通じて武城書院の学脈と人脈、政治史的性向が推し測れる。1冊の武城書院祭物冊は1734年に武城書院で使われた供物の目録と数量を記録したものである。賜額の後に官から供給された祭需物品の名目が載っている。

武城書院の祭享儀礼の中で供物を社堂に奉仕する際、地域の伝統儀礼と結合され、外三門の外から講堂の前庭を過ぎ祭享空間まで黄土をばらつく特異な事例が注目される。これは、武城書院のもつ独特な特徴で、先賢に上げる供物を神聖視して一切の邪まなことも犯接させずにするという辟邪の意味を持つもので、民間信仰と習合された儀礼と見られる。



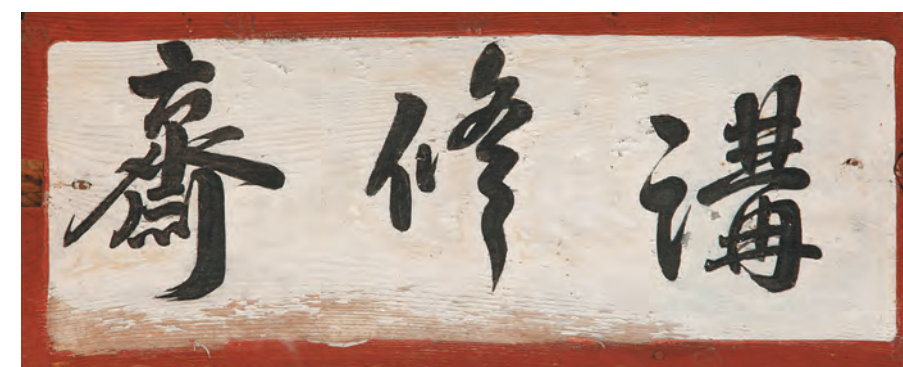
武城書院 1696 (肅宗22) 54.0X201.0



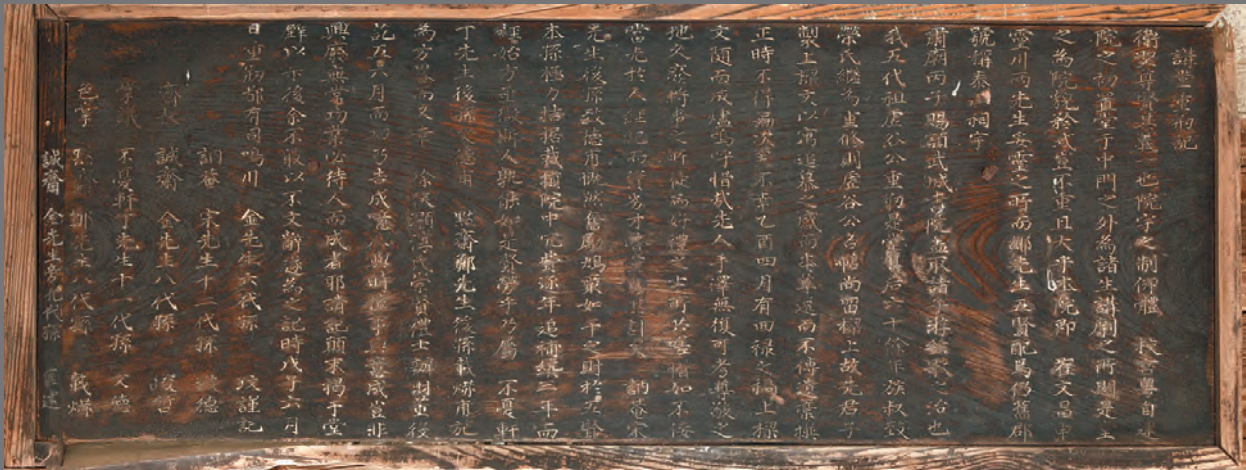
絃歌樓 1904 50.0X149.0



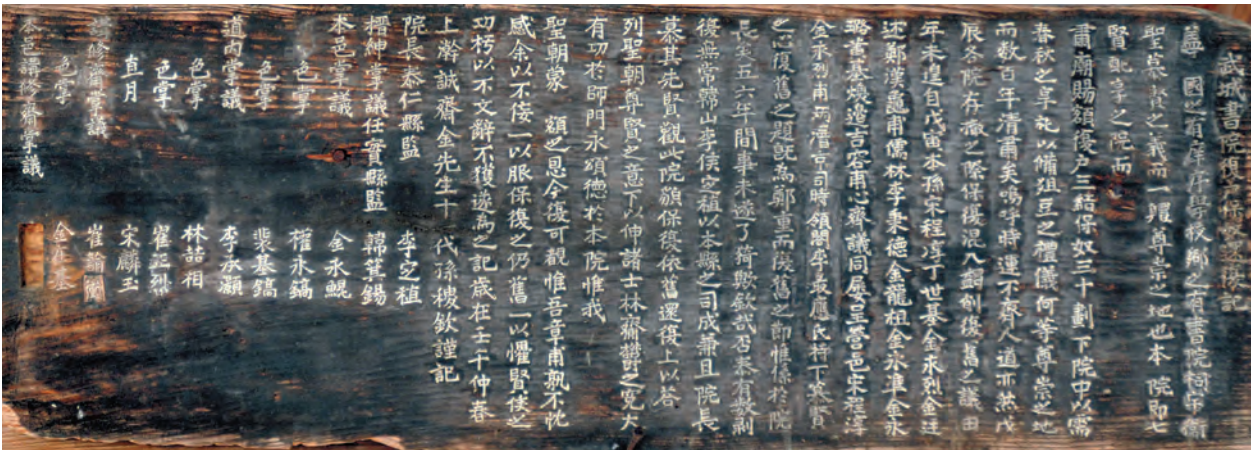
泰山司 20世紀 50.0X190.0



講修齋 19世紀末 26.0X63.0



講堂重創記 1828 (純祖28) 38.5X90.0



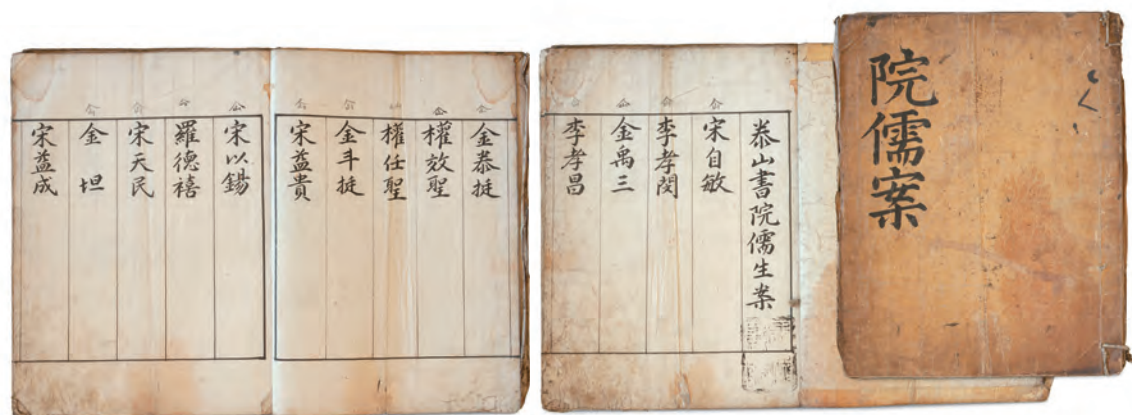
武城書院復戶保奴還復記 1882 (高宗19) 33.5X96.5



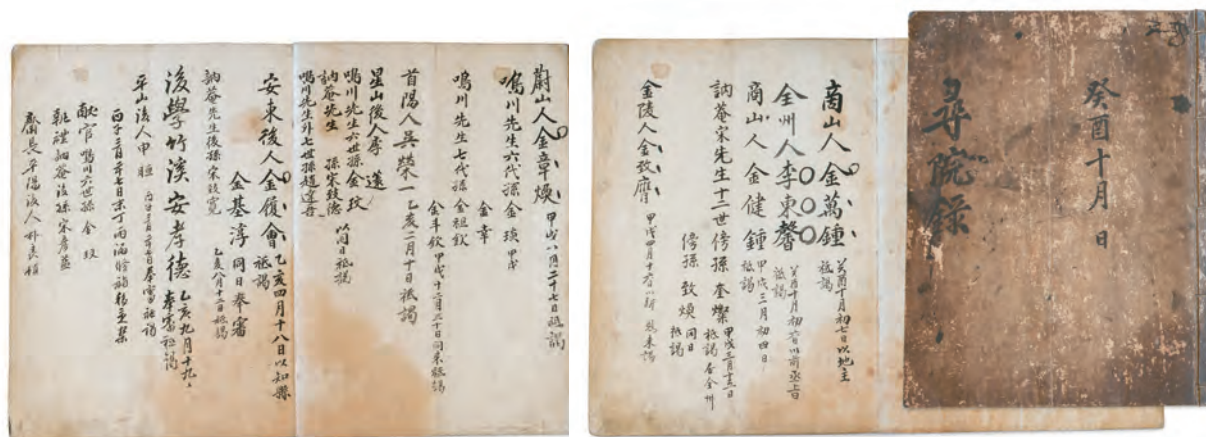
武城書院崔先生文集重刊記 1833 (純祖33) 38.0X94.0



武城書院誌改刊記 1884 (高宗21) 30.0X80.0



泰山書院院生案 1618-1620 23.0X19.0 (1冊24枚)



尋院錄·奉審錄 1612-1915 35.0X15.0 (6冊)



武城書院院生案 1773 (英祖49) 28.0X13.0 (1冊)





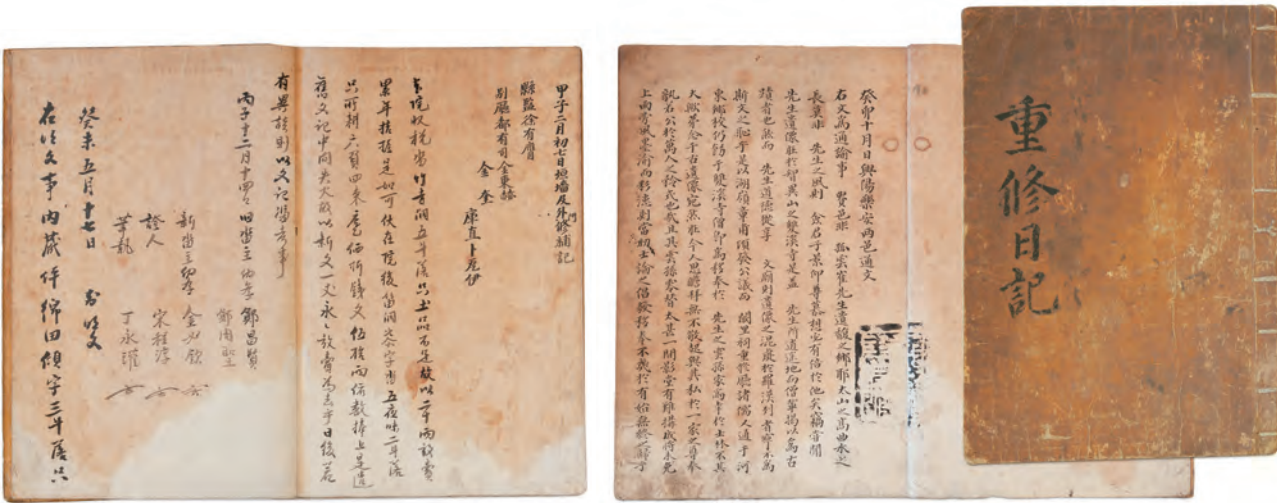
延額記事 1696 (肅宗22) 36.0X14.01 (冊58枚)



完文 1838 (憲宗 4), 1845 (憲宗 11) 25.0X16.0, 21.0X18.02 (冊15枚)



武城書院祭物冊 1734 (英祖10) 28.0X22.01 (冊3枚)



重修日記 1783 (正祖 7) 37.0X17.01 (冊17枚)



武城書院院誌 1884 (高宗21) 30.5X20.3 (2卷2冊)

黄土を敷いた神道



桂苑筆耕集 1834 (純祖34) 30.5X20.3 (20卷4冊)

講堂の中央間をって内三門に入れる祭物



武城書院祭物冊



影幀と位牌



終獻及び飲福受祚礼の後に再拜する三献官



た優れた建物として韓国に残られた唯一の事例である。

論山 遜巖書院

- 所在地：忠清南道論山市連山面林里74
- 創建年代：1634年(仁祖12)
- 賜額年代：1660年(顯宗1)
- 国家指定：史跡第383号



遜巖書院は性理学の実践理論である礼学を韓国的に完成した拠点として、凝道党は正寝理論を韓国の建築言語で再解釈して完成した優れた建物として韓国に残っている唯一の事例である。

主享人物：金長生(1548-1631)

遯巖書院は、朝鮮の性理学における礼学を確立させた金長生が祀れる書院で、1634年に創された湖西地域の代表書院である。遯巖書院は礼学を集大成した金長生の講学伝統を基盤に数多くの人物を輩出した。朝鮮において礼学研究の拠点として、礼書の出版と普及の産室であった。

静会堂と養性堂の講学伝統

遯巖書院は、沙溪金長生(1548―1631)の講学伝統を基盤として建立された書院である。金長生の講学活動は、父の金継輝が1557年(明宗12)に建てた静會堂から始まった。金継輝は連山に都落ち、後学の養成と郷村の教化のために静会堂を設立し、その伝統を息子の金長生が受け継ぎ、1602年(宣祖35)に養性堂を建て講学を始めた。

養性堂は湖西礼学の産室で、そこから排出された文人たちは、遯巖書院を建立した主役で人的背景となったことはもちろん、朝鮮中期以降には湖西士林の中心の役割を担う。

書院の建立と賜額

1631年(仁祖9)に金長生が世を去ると翌年の1632年に息子の愼独齋金集(1574~1656)を筆頭として金長生の門人たちが主導して書院建立を発議し1634年(仁祖1)に書院が建立された。1656年(孝宗7)に金集が亡くなると1658年に追陪が行われ、1659年には‘遯巖’の額を賜った。遯巖書院には、畿湖士林を継いだ湖西士林の主役が次々と祭享されるが、1688年(肅宗14)には宋浚吉、そして1695年には宋時烈が追陪された。

湖西首院、畿湖礼学の拠点

遯巖書院は創建以後、湖西学派の公論が形成される拠点となった。創建の由緒を創った沙溪金長生は、趙光祖・李珥・成渾をつなぐ畿湖士林の嫡統であり礼学の大家として、実践的湖西礼学の宗匠と呼ばれる。息子の愼独齋金集(1574―1656)は金長生の次男で、父と共に礼学の基本的な体系を設けて宋時烈などに学問を伝授し、畿湖学派の形成に重要な役割を果たした。彼はまた父の編纂した『疑礼問解』などを校訂し編集することに全力を尽くし、1648年(仁祖26)には、金長生の著書『喪礼備要』を重刊した。著書には『愼独齋文集』が、編著には『疑礼問解続』などがある。金長生の父子が養成した後学のなかの宋時烈・宋浚吉・李惟泰・尹宣挙・俞縈は湖西の五賢と呼ばれ、学問的、政治的にも影響力を行使した。

遯巖書院を中心に湖西地域の士林たちは、交流と講論、各種書籍の出版、師匠への追悼活動などを活発に推進し、孝宗の即位した後に北伐の中枢勢力を形成した士林の中には、金長生の門人から14人が布陣されていた。名実共に遯巖書院の排出人物が丙子胡乱のあとの17世紀朝鮮の政界と思想界を主導して公論を導いていたのである。

朝鮮後期に盛行された礼学は性理学をさらに深化させるきっかけとなった。17世紀の礼誦論争の展開とともに、礼書の出版は各学派の理論的根拠を備える主要事業であった。遯巖書院は西人礼学研究の中心的な役割を果たしており、特に遯巖書院で刊行された3種の礼書の『喪礼備要』、『家礼輯覧』、『疑礼問解続』などは遯巖書院が礼学書の刊行処として中心に立っていたことをよく現している。

遯巖書院の建築と凝道堂

遯巖書院は建築的な側面からも湖西地域の規範的で代表的な書院としての意味がある。遯巖書院は村と耕地が一つになった平野に立地し、遠くに山が眺められるところに立地した野景書院で、書院の門楼である山仰楼は遠くの山を仰ぐとの意味を持っている。金長生は養性堂記に‘仰而樂山 俯而觀水 触物悟理、すなわち、仰ぎ山を楽しめ、俯く水を觀せ、物触れりや理り悟る’と詠じた。配置構造も金長生が『家礼輯覽』で言及した書院建築の具体的な構造を実現し、遯巖書院は湖西地域の書院建築の模範となった。

祭享施設として祠宇の崇礼祠(惟敬祠)と典祀庁があり、講学施設として講堂の養性堂、応道堂と斎舎の居敬斎、精義斎などがある。養性堂の‘養性’は、金長生が心の修養のために‘存其心 養其性 所以事天也、つまり、其の心を存じ、其の性を養えりや 天を事える所以となり’との『孟子』の一節から取りつけた堂号である。そして、東斎は居敬斎、西斎は精義斎と命名し、東・西斎で授業する院生たちはすべからく居敬と精義をもって本性を養わねばいけないという意志をこめた。これが惟敬祠一養性堂一居敬斎・精義斎一山仰楼につながる遯巖書院に象徴された畿湖景観である。

そして、特に正面5間、側面3間の講堂である凝道堂は、遯巖書院の建物の中で最も規模が大きく古い建物であり、金長生が『家礼集覽』で言及した書院建築の礼制が忠実に再現された建築という点でその建築的価値が認められ、宝物第1569号に指定された。大きな建物は威圧的で、野暮ったい建物になりやすい。ところが応道堂は、組物・花盤・束柱などの構造材に装飾を使って屋根を軽快で美しく見せた。応道堂は優れた装飾手法を活用することだけでなく、畿湖学派の建築に対する考えを実践的に生み出した代表的な事例であるため、意味があり価値が大きいといえる。

礼書の出板と遯巖書院

礼訟論争として知られる17世紀の礼書の出板は、各学派の理論的根拠を備える主要事業であり、遯巖書院がまさにその役割を遂行したものと見られる。17世紀に入って『朱子家礼』を学問的に理解する水準が深化され、各種の注釈書とともに家礼のハングル化作業も行われる。遯巖書院の礼書出板は、西人礼学の中心的な役割を果たしたことに意味があり、特に遯巖書院から刊行された『喪礼備要』、『家礼輯覽』、『疑礼問解続』など3種の礼書は、礼学書の刊行において書院の役割を把握する短草となる。

『喪礼備要』は17世紀前半に申義慶によって書かれたもので、もともとは1巻1冊の分量だったが、1620年(光海郡12)に金長生がいろいろな部分を増補し続礼も添付して使いやすくし、序文を付けて体制を整えた。その後の1648年には金長生の息子である金集が再校訂し、2冊として1621年(光海軍13)に遯巖書院から重刊した。

『家礼輯覽』は10巻6冊で構成され、『家礼』の本文を中心とし、礼書の古典と様々な学者の関係説を注釈にして金長生が編纂した冊である。

金長生は『家礼輯覽』以外にも『疑礼問解』、『改葬儀』、『祭儀正本』、『礼記記疑』など様々な礼書を残した。

そして遯巖書院からは沙溪金長生と慎独斎金集の文集で『沙溪遺稿』、『沙溪年譜』、『沙溪全書』、『慎独斎遺稿』と『慎独斎全書』などが刊行されるなど、祭享人物の文集が相次いで出板された。

現在、遯巖書院には1922年に建立された蔵板閣に様々な冊板が所蔵されている。現存する所蔵の冊板は『家礼輯覽』169板、『經書辨疑』86板、『沙溪先生年譜』3板、『沙溪先生遺稿』160板、『沙溪全書』953板、『沙溪全書』(続) 79板、『喪礼備要』32板、『慎独斎年譜』13板、『慎独斎先生遺稿』202板、『慎独斎全書』140板、その他4板で計1,841板がある。

古文書としては、「金長生文廟配享教旨」、「遯巖書院儒生到記」、「沙溪慎独斎両先生門人録」など10種が伝わる。懸板・記文資料は、遯巖書院の上梁文と扁額、養性堂の記文と重修記、移建記などがある。



遯巖書院 1660 (顯宗1) 85.0X230.0



凝道堂 未詳 80.0X185.0



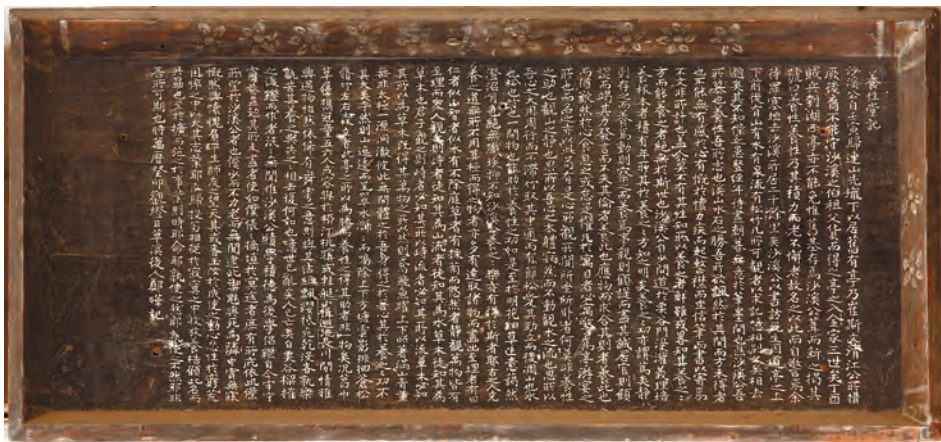
崇禮祠 現代 65.0X200.0



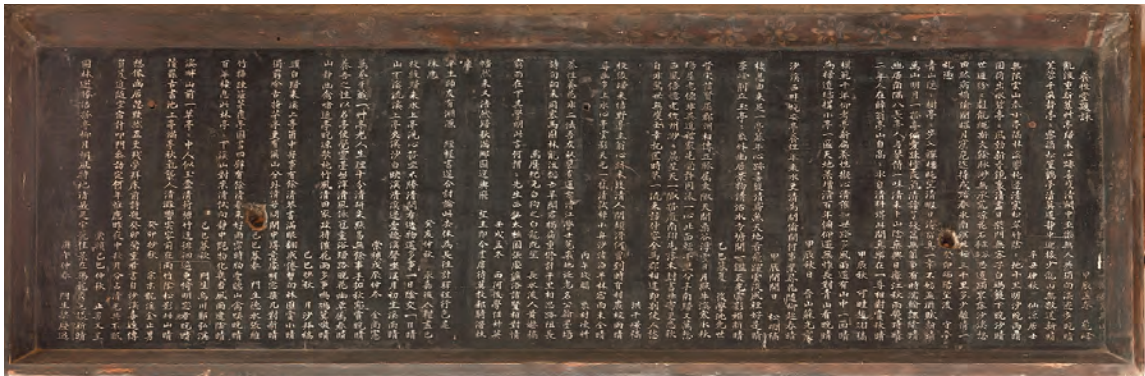
養性堂 1660 (宣祖35) 55.0X150.0



靜會堂 17世紀初 44.0X107.0



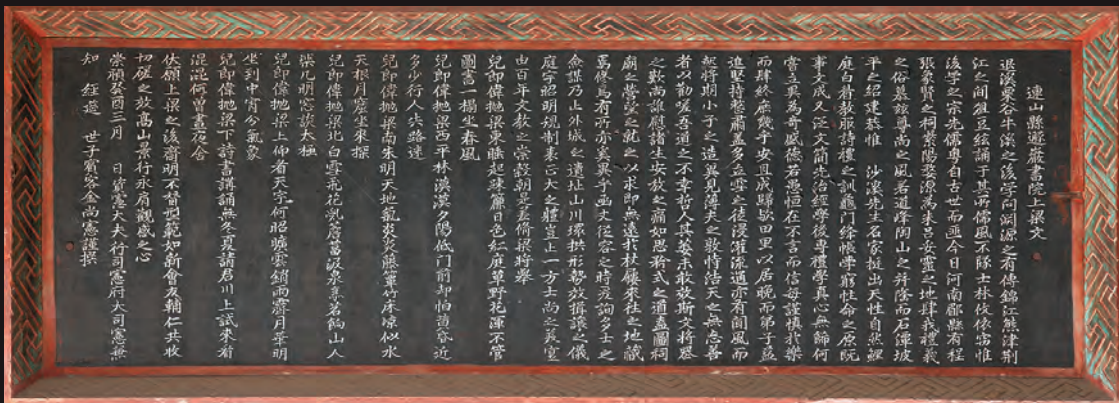
養性堂記 1603 (宣祖36) 45.0X100.0



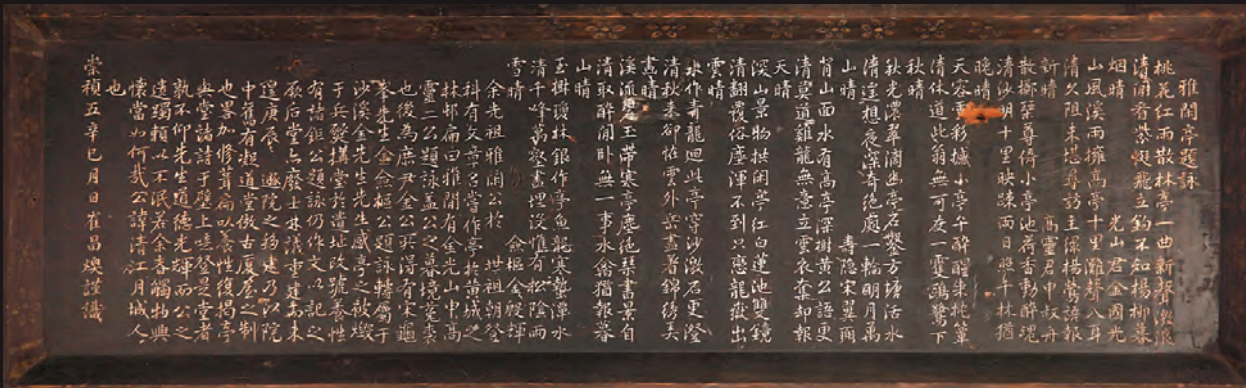
養性堂題詠 17世紀前半 45.0X120.0



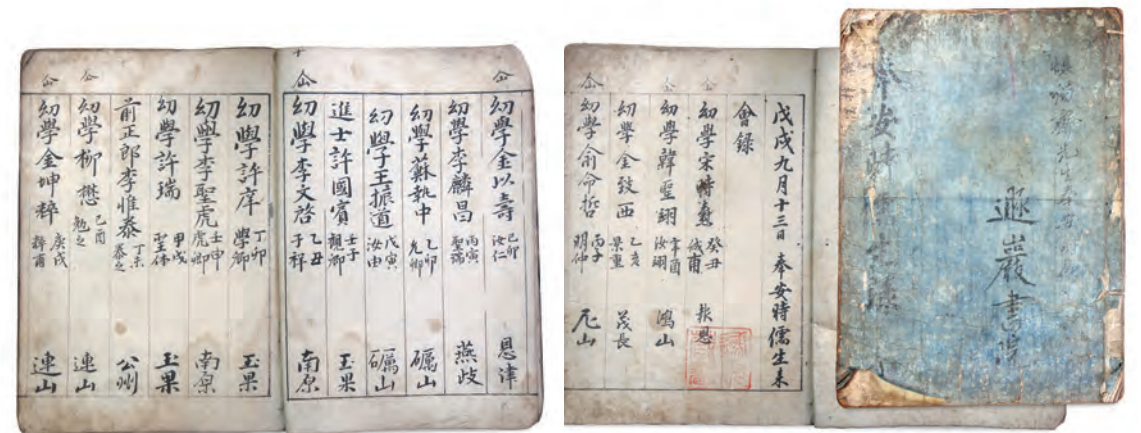
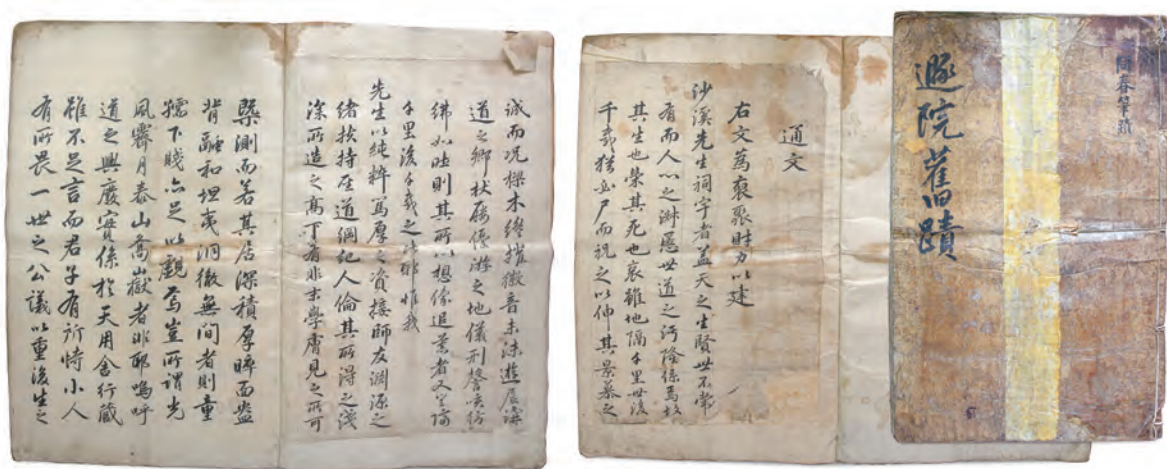
養性堂十詠 17世紀前半 45.0X150.0



連山遯巖書院上樑文 1633 (仁祖11、3月) 37.0X103.0



雅閑亭題詠 1881 (高宗18) 40.0X127.0



慎独齋先生奉安時儒生來會錄 1658 (孝宗9) 37.0X26.5



遜院旧蹟 1632 (仁祖10) 66.5X42.5



院中旧蹟 1688 (肅宗14) 66.5X42.5



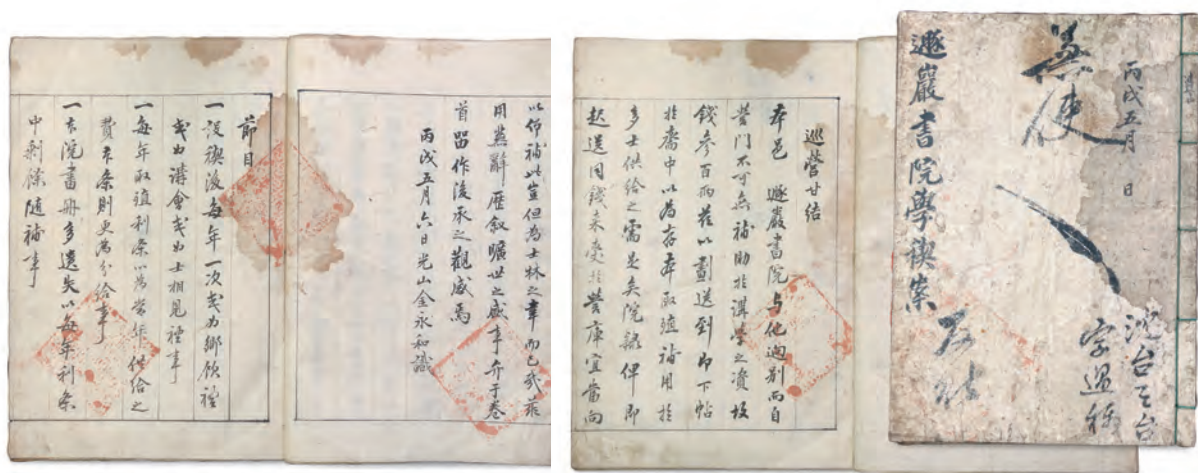
遜巖書院齋任案 1738-1846 36.5X24.5



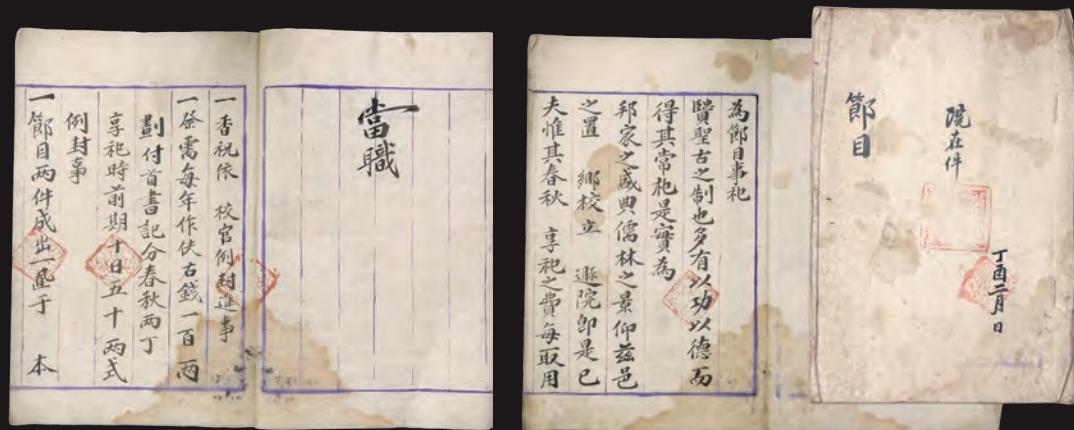
遜巖書院田沓量案 1781 35.5X25.5



齋中記簿 戊午年3月 34.5X20.5



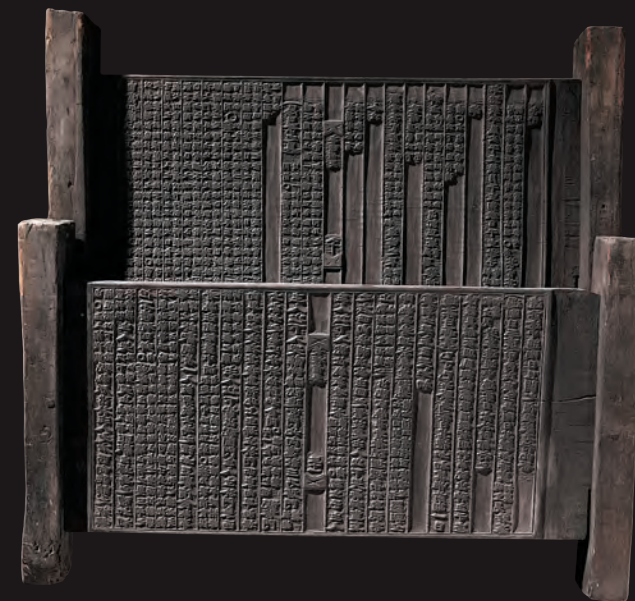
遜巖書院 學契案 1886 (高宗23,5月) 32.5X23.0



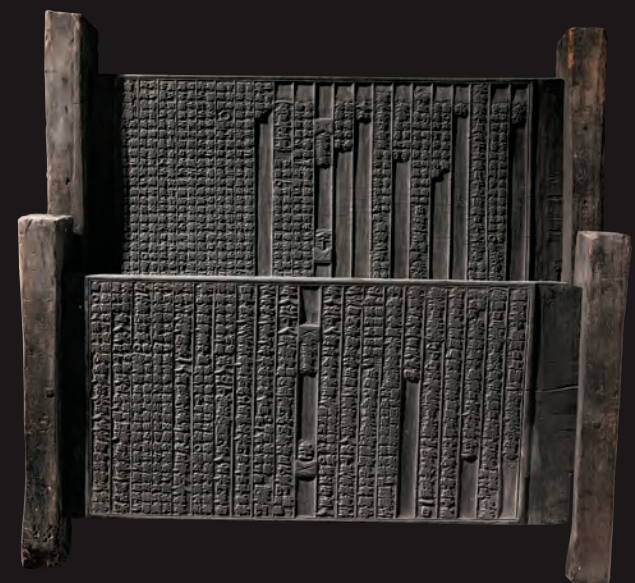
節目 1892 (高宗29,2月) 37.0X25.2



慎独齋遺稿と慎独齋全 1710 (肅宗36), 1924 54.0X29.5 (7冊), 51.0X27.5 (9冊)



喪礼備要 冊板 1648 (仁祖26) 51.0X34.0 (2冊)



家礼輯覽 冊板 1685 (肅宗11) 60.5X30.5 (6冊)



慎独斋遺稿と慎独斋全 冊板 1710 (肅宗36), 1924 54.0X29.5 (7冊), 51.0X27.5 (9冊)



沙溪遺稿·沙溪年譜·沙溪全書 冊板 1792 (正祖16), 1922 沙溪遺稿 50.0X31.5 (6冊), 沙溪年譜 50.5X23.0 (6冊), 沙溪全書 50.0X28.0 (24冊)

3籩3豆の陳設



山罍



祭服



享祀の前に祠堂の前で祝文に初献官の名前を書く



西門から出る献官



典祀庁で祭器を磨く



典祀庁から祭物を運ぶ



撤籩豆



享祀を奉行する前に玉燈蓋に火を灯す



世界遺産

韓国の書院

記録文化と祭享

発行

李培鎔 (財)韓国の書院統合保存管理団 理事長

進行

(財)韓国の書院統合保存管理団 事務局

後援

大邱広域市, 忠清南道, 全羅北道, 全羅南道, 慶尙北道, 慶尙南道,
栄州市, 安東市, 慶州市, 論山市, 長城郡, 井邑市, 咸陽郡, タルソソ 郡

執筆

李海濬 (公州大学 名誉教授)
李樹奂 (永南大学 教授)
李炳勳 (永南大学 研究員)
金熹台 ((前)全羅南道文化財専門委員)
朴珍載 ((財)韓国の書院統合保存管理団 室長)

翻訳

禹成勳 (成均館大学 兼任教授)

発行日

2021. 12.

住所

(財)韓国の書院統合保存管理団
(02861)ソウル特別市城北区普門路183、ノンヒョンビル802号

電話とファックス

+82-2-3673-5441, +82-2-3673-5444

Webサイト

k-seowon.or.kr

デザイン・編集

グラフィックコア

凡例

この本は、韓国書院の有・無形の価値を知らせるために、2013年に
発刊された韓国の書院図録3種（懸板と記文、古文書、古書、冊
板、祭享儀礼）の主要内容を簡潔にし、新たに改正増補版にした書
物である。
この本は9つの書院が位置する14個所の地方自治体の支援で作られ
ており、本に使用された写真は図録3種の出処と同じである。

